
Nehalem (ネヘイレム)

四輪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネヘイレム
Nehalem

【Nコード】

N3128W

【作者名】

四輪

【あらすじ】

古代日本世界観と融合した艦隊SF。

黄泉宇宙より迫りくる邪神と戦う人類と、感情のない主人公が一人称視点で語る人間模様を描く。

それは生ぬるい泥のような場所だった。

太陽は闇に侵食され、救いを求める亡者の手のようにコロナの炎がうごめいている。当然周りは暗い。黄昏時のような——となり歩く人の顔も見えない。もっとも、船外作業用の防護服をみんな着用しているので、顔なんか見えるはずもないんだけど。

空気を泥のように思うのは、きっとこの防護服のせいだ。宇宙線から『穢れ』までを遮断してくれる頼もしい鎧は、しかし重さと暑さの点でまったくいただけない。宇宙でなら少なくとも重さの制約は消えるわけだけれど、あいにくここは地球上の一角で、黄泉でも高天原でもなかった。ただ、この街は宇宙と同じようになってしまったというだけ。

もし不愉快な背中の中を汗を拭こうと防護服を脱いだなら、その瞬間に黄泉の穢れが流れ込み、僕の人生をどうしようもなく狂わせてしまっただろう。ひょっとしたらその瞬間にでも、いままで気づきもしなかった持病が実は存在していて、心臓を止めてしまつかもしれない。穢れは因果律の因と果の間に歪みを生み、その程度がひどいほど、ひどい結果をもたらす。死ぬと言う結果を導くために、その原因を捏造してしまう——と解釈してもいい。

だからどんなに背中がじつとりしていても、ぬぐうことすらできないまま、僕は一団に混じって歩いた。街並みは清潔で、暗さの割に街灯ひとつ灯っていないことをのぞけば、なんてことのない日常の風景に見える。デパートのショーウィンドウの中では、マネキンが冬物のコートを大事そうに羽織っていて、でも季節は夏だった。それが展示されてから、もう五回は夏がめぐってきているはずだ。

僕たちはメイン・ストリートを抜けて住宅地へ入ったようだった。

閑静な住宅街、って言うのは定冠詞のようなものだけど、人っ子ひとりいないのでは、ほどがある。相変わらず周囲は暗く、小さな公園にブランコが死体みたいにぶらさがっていた。犬猫も、スズメもカラスの姿もない。見上げると空が紫色だった。

「見覚えがあるか？」

すこし立ち止まったせいかな、となりで重そうなサブマシンガンを抱えている男が話しかけてきた。上司に当たる、トウキ・ラシャだ。「いえ、べつに」

わざわざ、こんな場所へツアーを組んでもらった意図はなんとなく理解しているので、もつと気の利いた返事を返したかったけど、わからないものは仕方ない。

「君の家の、近所だそうだ。あのブランコも、小さい頃乗って遊んだはずだ」

「近所なら、そうしたでしょうね」

それでも、僕にそのような覚えはない。反対側となりから、同じくサブマシンガンを手にした女性がトウキをたしなめた。

「こら、急かさないの。今日はそんな用事でここへきたんじゃないんでしょ」

女性は、これも上司に当たるキリエ・ラシャと言う。トウキとは兄妹で、ふたりとも白兵戦のプロフェッショナルだった。ここへ来たメンバーのうち僕の顔見知りはこれだけで、あとは別の基地から集められた人員だ。

公園からほどもなく、一団は進行をやめた。いままで目的地に向かって歩いてきたのだから、ここが目的地だってこと。でも目の前にあるのは変哲のない家屋で、やっぱり人の気配はなかった。

いや、だれかが表札のあたりを注視していたので、それに目を向けた瞬間、目的を理解できた。『マクベス』とある。つまり、僕の家——生家だった場所だ。

二階建て、小さな庭つき。資料では僕に兄弟はなく、両親と三人暮らしだったそうだ。典型的な核家族。親もサラリーマンと主婦で、

ここに十歳まで過ごしていた。

すべて、後で知ったこと。僕に記憶はない。五年より以前のこと
は、なにも。

「ルーン・マクベス准尉」

咳払いして、トウキがしゃちほこばった調子で言った。さつきも
聞いた質問をするのだろう。僕は手間を省く。

「思い出しません。はじめて見たように感じます」

「そうか。まあいいさ。……で、うちの艦長殿がおっしゃる秘宝は
どこにあるんだ？」

「そうよ。宝探しに来たんでしょ」

トウキは投げやり、キリエはうきうきとした様子だ。艦長の言葉
を真に受けているキリエと違って、トウキは早く帰りたいようだ。

僕も同感だった。こんなことになんの意味があるんだろう？ 思い
出さなくても不都合なく生きてこられたし、これからもそうできる
自信はある。それでもだれかが僕に思い出してほしいと願っている
から、わざわざ一個小隊もの人員を裂いてこのツアーが計画されて
みんな危険な場所へ踏み込んでいるのだ。

誰。だれなんだろう。

記憶を無くす以前の僕を知る人物と、何人が会って話をしたこと
がある。転校していった小学校の同級生とか、遠くの親類とか。こ
の土地に住んでいない、僕の知り合いだった人。面と向かつては言
われなかったけど、みんな僕のことを、昔の僕とは別人のようだ
と口を揃えたらしい。それが本当なら、僕が僕である意味とはいっ
たいなんだろう。ルーン・マクベスと言う名前はこの肉体につけられ
たタグに過ぎず、記憶もなく人格も違ういまの僕が、そのタグを付
け続ける意味はなんなのか。それは昔を知るだれかが、僕が僕であ
ってほしいと言う願いの現われなのか。それともタグのみが絶対で、
その実は無意味なのか……。

地鳴りが響いた。考え事をしている間、トウキたちと別の基地の
連中とは、すこしもめていたようだ。しかし地鳴りを聞いた瞬間、

電源を入れたロボットみたいなすばやさで、事前に打ち合わせたフォーメーションに散った。僕が真ん中で、星型に位置どっている。

「注意。警戒、左20。撤退を開始する」

リーダーの中年……名前はなんと言ったか。その合図で、僕たちは小走りに来た道を戻り始めた。公園を過ぎ、住宅地を出て、メイン・ストリートへ入る。

ロオオオオオン……。

水底で鐘を撞いたような音が鳴り響いた。腹の、丹田のあたりにずしりと響く重低音だ。聞くだけで気分が悪くなる。暑さと重さで倒れそうだった。

「くるぞっ！」

だれかの叫び。そのとたん、電信柱が根元から真っ黒く染め上げられていった。

「インストール降臨が始まった！ 対象物は電柱、マネキン、ポスト——」

電信柱の天辺まで黒く染まった瞬間、それはまるで粘土みたいにぐにやりと曲がり、薄気味の悪い触手を伸ばした。それが振り下ろされ、地面に激突してアスファルトが飛び散る。

「A班攻撃！ B班は護衛に徹しろ。B班、回収ポイントまで先行、急げ！」

銃声。黒い電柱に穴が空く。排莢が路上に散らばる。腕を取られた。キリエだった。

「行くわよ」

B班はトウキとキリエだ。ふたりともまるでなにも身に付けていないかのように軽々と走る。僕は引かれる手の速度に合わせるので精一杯だった。これは僕の体力が劣っているのではなくて、ラシャ兄妹が異常な身体能力をしているだけのことだ。

ガラスの割れる音。真っ黒い人影が走り寄ってくる。乗っ取られたマネキンたちだった。コートを翻して、場違いなガラスのようだ。すぐ脇から銃声。耳がキンとする。マネキンは走りながら倒れて地面を何回転もしてから、はじけて消える。

「ちいつ」

トウキが舌打ちする。周囲の暗さは度を増していた。防護服のヘッドライトを最大光量にしても見通しが利かない。これは物理的なものではなく、心霊現象だ。僕はサイドバックからPDAを取り出すと、防護服の思考入力端末にコードをつないだ。

「払います」

瞬時に言霊式を組み上げ、発動。PDAのスピーカーが言霊を発する。周辺が浄化され、視野が確保された。

「さすがね。あの一瞬でプログラミングするなんて」

キリエは僕を褒めてから前方にフルオートで一秒掃射。間をおいてなにかがはじける音が続く。僕からすれば、百五十メートルは先の物体に命中させられる腕前のほうがすごいと思う。

追っ手はA班が食い止め、前方の障害は少なかった。トウキとキリエの的確な射撃。瞬きする間に交換されるマガジン。ツンとする火薬のにおいが、防護服を通り抜けて感じられるようだ。振動する。走る。太陽は黒く日食されている。

ギャギャギャギャツ！

突如横合いから大きな塊がカン高い音を立てて現れ、僕たちの行く手に立ちふさがった。

「車に降臨してやがる」

トウキが吐き捨てた。それは闇に染まった色のSUVだった。ドアを虫の羽みたいになたなとさせながら、歩くみたいにタイヤを前後させている。後続から悲鳴。振り向くと、ビルの屋上からなにかが落ちてきたようだった。馬鹿でかいボール状のもの——給水タンクか。黒すぎてよくわからない。

「突破するぞ」

「ええ」

ふたりはうなずきあい、左右からサイドアタックをかける。排莢が僕の周囲に散らばるように計算されていた。莢の表面には言霊が彫り付けてあって、短時間なら護符のような作用がある。

車の側面に両側から穴が空いた。ガラスが割れ、タイヤが飛び散り、ドアが吹っ飛んだ。弾丸にも言霊が刻んであるのだ。9ミリと言えど、神聖に清められた弾頭は、爆弾や光学兵器以上にダメージを与える。

車は蜂の巣になって動かなくなった。三次元での活動限界を迎え、弾け散る——と思いきや、車内が膨れ上がり、カニの足のような触手を数本伸ばして、車体を持ち上げた。地鳴り。鐘を撞くような音が続く。僕は吐き気をこらえ、PDAを操作する。

「トウキさん！ そいつは、神格が高い！」

PDAでスキャンした結果を叫ぶ。返事はもちろんない。サブマシンガンの断続的な銃声が立て続けに起こる。カニ足が一本ちぎれて、さらに二本が奥から生えてきた。

威容。見上げるほどに成長したそいつを表現するには、それしかなかった。これが僕たちの戦うもの。僕から記憶を、故郷を、家族や友人を奪った元凶。

邪神だった。

黄泉宇宙の神をひと括りにして邪神と総称する。人類に害をなす、世界の敵。通常、高次元に存在する『神』は、三次元世界へ依り代を媒体として降臨する。御神体として選ばれるのは魂を持たない無機物や昆虫、植物だ。身体を得た邪神は物理的な脅威を持って人を襲う。

キヤリキヤリキヤリキヤリ！

耳障りな音を立て、さらに二台の車が横合いから現れた。トウキとキリエは背中合わせに陣形を取りながら、僕のところへと戻ってくる。進路は塞がれた。ふたりの荒い息遣いがフェイスマスク越しにでも感じられる。僕の身体は相変わらず泥のようだった。

「おい、詰んだぜ。どうするよ、少年」

人事みにたいにトウキが言葉を投げかける。僕は受け取って投げ返す。

「三十秒」

「ちっ、長げえな。きっちり仕事しろよ、ハッカー」

うなずく。ふたりは、昔のニンジャ映画みたいに左右へ散る。PDAを操作。目を閉じ、プログラミングに集中する。脳内で組み上げられた言霊式がリアルタイムにPDAに出力され、それでも処理の遅さに若干イライラさせられた。処理待ちの状態になって目を開くと、三体の邪神を相手にふたりが互角に戦っている様子が見えた。普通、あの神格の邪神では一体に一個小隊が必要だ。それでも勝てるかどうか。

処理が終わった。PDAから出力する。つまり、言霊の発動。スピーカーから圧縮された音声がプログラムの結果を伝達する。空気の分子が振動し、空間に言霊が染み渡る。次の瞬間。

ボツ！

邪神の一体が油でもかけられたかのように燃え上がった。爆発に近い。青白い炎は千三百度前後を示している。『ナパーム』と呼ばれる言霊式を、少し改造して発動させたのだ。触手をのたうたせて、邪神は苦悶しているように見える。神が苦痛を感じるものかどうか、それはよくわからないけど。

「ルーン君、伏せて！」

キリエの鋭い声に、僕はとつさに地面へ転がる。真上を銃弾が通っていった。背後で何かが打ち抜かれる音。首だけ向けると、真っ黒いマネキンが二体、両手を振り上げた状態で胸に穴を空けていた。それがはじめて消える前に、僕は体勢を立て直す。見ると、燃えた邪神の炎が消えかかっていた。やはりPDAの処理能力では太刀打ちできないようだった。

「めんどくせえ！ 弾が切れるぞ」

「こつちもよ！ A班の馬鹿はなにやってんの」

後方からはまだ銃声が聞こえている。確認している余裕はない。炎の消えた邪神が、僕をターゲットに定めたのがわかった。PDAにアクセス。何種類かの言霊式を検索。改造してから使わないと効果がないさそうなものばかりだった。

「建物の中へ！ 立て直しましょう！」

「馬鹿、逆効果だ。文房具と室内戦したいのか」

「時間を稼ぐのよ」

しかし、どうやら、その必要はないようだった。

聞き覚えのある音が上空から響いてくる。銃声がやみ、邪神の動きが止まった。ほどもなく、暗い上空を縦に切り裂いて、轟音を上げた飛行物体が現れた。青いシルエット。大きく広げた翼。突風のような風を巻き起こし、それをためかせて、ゆるく旋回。

「タケミカヅチ！」

キリエの嬉々とした声。アナウンスが上から告げる。

『射撃開始十秒前。総員退避！』

あわてて建物の陰に移る。ふたりも駆け込んできた。

『対地砲、てーっ！』

メインストリートにジグザグの弾痕が刻まれる。それは雷が這い進むように邪神たちの上を通過し、ビル街の向こうまで抜けていった。激震のような轟音。振動。遅れて、飛び散った土くれが降りかかってくる。

バシャッ！

バシュッ！

拳大の砲弾を打ち込まれてはたまらない。車に降臨した邪神は、お椀状のくぼみをいくつも空け、破裂するように消滅させられていく。デリート

見上げる。上空に鳥を模した艦影。あめのとりふね天鳥船と呼ばれる、連邦軍の

軍艦。

僕の乗る船。

高速駆逐艦タケミカヅチ。

初めて目にしたときの感動がよみがえる。

こんなに美しいものがこの世界にあったのかと驚いた。

青いカラーリングも、着艦時には折りたたまれる飛行ユニットも、長く伸びた首の上のブリッジも、他の艦船と同じつくりなのに、タ

ケミカツチだけが峻厳たる鷹のイメージを浴びせてきて、僕を取り込んだのだ。

「いまのうちだ。行くぜ」

トウキに肩をたたかれるまで、上を見ていた。あれに乗ることが、いまの僕のすべて。記憶も人格もどうだっていい。噛み合わさったギアのひとつのように、艦の一部になれたなら、そんなものはなにも、一切関係がないからだ。

地上にいる僕は、泥のようだった。

C p 2・インナーユニバース

1

出撃は三日遅れて、十日後のことだった。作戦スケジュールが土壇場で乱れることは珍しく、理由は上層部のシステムトラブルだそうだが、はたしてそんなもので三日も遅延するのか怪しいものだ。

初日は地上から黄泉へ入るだけ。世界と世界の間を渡るのだから、かなり繊細な作業を要求されて、僕も忙しかった。具体的にどうするのかと言うと、まず、地上にあるブラックホールから、ワームホールに突入する。ようするに、大きな穴で、その中は管になっている。これは異界をつなぐ通路であり、古くは、黄泉津比良坂よみつひらさかとも呼ばれた。管の中は物理的にめちゃくちゃな世界だから、艦を制御するのもたいへんだった。ただどいやな作業じゃない。布団に入って目が覚めるのを楽しみにしながら眠るような感じ。きっと楽しいことがある、そんな予感に浸っていられる時間。

ワームホールから、出口のブラックホールを抜けると、そこは黄泉だ。インナーユニバースとも呼ばれる、地底宇宙。空の上にある高天原宇宙と対をなす、もうひとつの宇宙だ。

黄泉にはなにもない。高天原と違って、星の輝きも、なにひとつ高天原には、一立方センチメートルあたり、平均一個の水素があるけれど、たぶんそれすらない。すべてが黒く、夜の闇ですら、この黒にはかなわない。きっと、この色は、物理的に表現できないし、だれかに伝えることも不可能だ。実際、黄泉へ行って、目にしたもののだけが知ることのできる黒。そしてその機会は、いつかやがて、だれしにも訪れる。

黄泉には昼も夜もないのだけど、人間が生活する以上、そいつを設定してやらなくてはならない。タケミカヅチでは、通常シフトの場合、夜がくると当番以外は部屋に戻って就寝する。僕はトウキと

相部屋だ。艦長だけは個室で、あとは二人部屋から四人部屋だから、乗組員十数名のうちで、自然な選択をするところなる。つまり、二人部屋を使用する権利のある、ブリッジに詰めるような士官で、残る男はこのふたりしかないってことだ。

トウキはずばらさが立体化したような人間で、まず、掃除をしない。服をたたまない。髭も剃らないし、そんな暇があるなら、寝るかトレーニングをしている。細胞の中に秒針を仕込んでいそうなジーク艦長とは対照的だ。唯一、トウキが几帳面に見えるのは、床の隅に寝そべって腹筋運動をしているときだけれど、それは単にその動作が、メトロノームっぽいだけのことだ。

だけど、頼りになる。僕が地上で邪神に襲われたとき、すこしも怖くなかったのは、トウキを信用していたからだ。もちろんキリエのことだけれど、あつちは年が近い分、友達みたいな感覚なので、頼りにするつてのとは、ちよつと違う。

寝る前にすこし、話をすることが多い。相部屋だけどそこそこ広くて、二段ベッドじゃないし、お互いをパーティションで区切ることもできる。トウキはもちろん、僕もめんどくさいので、いちいちそんなものを引いたりはしないのだけれど。だから寝るとき、首を傾ければトウキの姿が見える。でもたいていは天井を見ながら話をする。

黄泉へ入ったばかりはバタバタしていたから、就寝もそろわなかったし、疲れてすぐ寝てしまった。二日目は集合ポイントまで移動するだけだから、話したのはその夜だった。

「銃を撃ったことはあるか？」

独特の、映画俳優みたいに渋い声色で、トウキはそう言った。おかしい質問だ。拳銃の扱いは必修項目で、オペレーターの僕ですら、苦労して習得した。射的は大の苦手なのだ。あの小さな弾が、あんな遠くの的まで移動する、その物理現象を物理的に制御するなんて、それもこの腕一本で、あまつさえ引き金を引くのは指ひとつだ。本当に命中させようとすると、気流やリコイルの予測計算だけで脳が

パンクしそうになる。連邦軍の軍事コンピューターにアタックを仕掛ける方が、まだ簡単だ。

「二、三日前から、すこし」

それでも、人間は実現に向けて努力していくものだから、出撃が伸びた三日の空白のうちに、基地の射撃訓練場へ足を運んでいた。アーリイを守るのに、一番てつとり早く役に立ちそうなのは、拳銃の腕前だろうと思ったからだ。ただ単に、思考が短絡しただけかもしれない。

訓練場の教官は、補助輪を外したばかりの子供に自転車を教えるみたいに丁寧に指導してくれたけど、僕はよちよち歩きの赤ん坊にまっすぐ立つ方法を教えるところから始めてほしかった。つまり、まったく、成果に見込みがなかったってこと。僕が持ち帰ったものと言え、指にできた豆くらいのものだ。

「どうだった？」

「なにがです？」

「ものになったか」

「計六時間程度の練習で、ものにできるなら……」僕はくすりと笑う。

「ま、なにことも反復だな。正直、似合っちゃいないよ。やめた方がいい」

なら、なんでそんな質問をしたのか。でもやめた方がいいというのは、自分でも思ったことだったので、採用することにする。トウキはすこし黙ってから身じろぎをした。半身を起したのかもしれない。僕は天井を見たままだったので、それは確認できなかった。

「……サクヤになにか、吹き込まれたな」

「なにか、って、なにを……」

「そいつはわからんさ。ただ、気をつけておけ、あいつはあっち側の人間だ」

「あっち？」

「ジークサイドってことだよ。うまく立ち回らないと、利用される

ことになる。またいつか、この前みたいなことになるぞ」

黄泉へ堕ちた街へ出向いた時のことか。いま思い返すと、あれは本当に嫌な任務だった。そう言うのを回避するためなら、トウキの忠告も聞いておく価値があるのかもしれない。

「トウキさんは、なにサイドなんですか？」

「おれか？ おれは単純明快、スタンドアローンさ」

「そう言うと思いましたよ」

予測が当たって、すこし機嫌がよくなる。反対側のベッドから、鼻を鳴らすような音。おそらく、短く笑ったのだろう。

「気づかなかったんだな、やはり」

「ええ……、」勢いで返事をしかけて、思いとどまる。「なにをです？」

「射撃訓練場におれもいたってこと。離れたレーンだったけど……」

「そうだったんですか。三日前？」

「いや、おととい」

「どうでした？」

「なにが？」

「ものになりましたか？」

今度は、声を上げてトウキは笑った。横隔膜の振動で、ぎしぎしとスプリングのきしむ音が聞こえた。ひよっとしたら、相方のベッドは寿命なのかも。

「ああ。手ごたえがなさすぎて、豆腐を撃ってるみたいだった。だからすこし退屈して、お前を見つけたのさ」しかしそこで、急に声のトーンが変わった。怪談話で急におどろおどろしい話し方になるみたいな感じだった。「お前に付いてた教官な、あいつ、下手糞が来ると鬼みたいになるんで有名なんだ」

「へえ……。それは、そんな印象じゃなかったですけど。あ、ひよつとして」

「お前は下手糞だよ。スコア見てみる。おれなら小指で引き金引いたってもう少し出る」

「ですよ」

「目だよ」不思議なことを言っ、トウキはふつと息を吐いた。「あんな目をしてターゲットを睨んでるやつなんて、いやしねえ。ぞつとしない。あの紙っぺらは、親の仇なのか？ どうなんだ」

「え？」

「お前のことだ、ルーン・マクベス。教官のやつ、漏らしそうだったぞ。あんなに鬼気迫って、射撃の練習をする必要があったのか？」

「わかりません。でも、見間違えじゃ？」

「なにか、よからぬ影響を受けているみたいだな……」ため息みたいな声。トウキの物言いは、はつきり言いたいことを伝えてくるので、駆け引きがない。「とにかく、あれだ。銃はよせ。下手な鉄砲数撃ちや当たる、なんて言うけどな、お前が想定しているような艦内戦闘でめくら撃ちされたら、こっちがたまらないんだ。ポイントマンが、背後まで神経を配りながら進路を確保するなんぞ、お前、できると思うか？」

「いいえ……、なら、僕はどうしたらいいと思いますか？」

「どうもするな。もしくは、もう寝てしまえ」

言いたいことを言っ、面倒くさくなったのだろう。トウキは話を打ち切る気配を見せた。今度は僕がそつとため息。たいへんなことを依頼されたって直感、やっぱり正しい。

もう寝に入ってしまったと思ったトウキが、しばらくして思い出したように言っ。何か思い付いてくれたのではなくて、別の話題だった。

「そっ、いや、出撃が遅れた理由。うわさだが、聞きたいか？」

「ええ」興味はなかったけど、しゃべりたそうにしているので、うなずいた。

「中央の頭脳が、逃げ出したらしい。それも『始祖AI』、エニアリスだそう。知ってるか？」

「いえ……、」ここ最近で、たぶん、一番驚いた。眠気なんか一気に飛んでしまったほどだ。「どうしてです？」

「そこまではわからないさ。ただ、世界で最初に自我を持ち、もつとも長く経験を重ねたＡＩが逃亡するなんてこと、尋常じゃないな」
「なんでだろう。どうやって逃げたのかな」

「アンドロイドの身体に入り込んで潜伏してるってのが有力だが、あの容量の情報体が人型に納まるのか？ そこんところ、すこし聞きたくってな」

なるほど、それなら僕の専門分野だ。ちょっと考えてから、結論を話す。

「できると思います。対邪神戦闘用アンドロイドなら」

「あの、馬鹿でかい容量のハイスペック機か……。でもそんなレアな機体、管理だって厳しいだろ？」

「ええ。だから、もつと単純な部分だけ、通常の機体に移したとか、もしくは電子網を通じて、コンパクトな形で潜んでいるとか……。自己圧縮して、記録スフィアに収まっている可能性もありますね。おそらくは、容量の大きな記憶やプログラムには、錠前を下ろして、鍵だけの状態になって逃げているって言うのが、実際じゃないでしょうか」

「さすがだな……」トウキは唸った。「連邦のお偉方が汗食って行方を搜してるつても、実はエニリス自体の確保が目的じゃなく、それが封印していった膨大な情報が問題だって話だ」

「まともに解除しようとする、数年はかかるでしょうね」人ごみみたいに告げてから、ふと、それが自分たちにも関わりある事態であることに気がついた。「あれ……これって、戦争に影響しないんですか？」

「してるじゃないか。三日遅れた」

「あ、そうか……。たいへんだな」

「言っておくがこの話、表立って話すと謹慎物だ。おれが教えたつて口が裂けても言っなよ。わかったな」

「それは、もちろん……」戦争への影響がどの程度なのか、気になりはじめた。外部の余計な要因で、タケミカツチの動きが制限され

るなんて、まっぴらごめんだ。

「ああ。じゃ、寝るわ」

その時にはもう、トウキの言葉は耳に入っていなかった。エニアリスの件をどう調べようか、そのことで頭がいっぱいになっていて、もちろん眠るどころではなかった。

明日、黄泉に入ってから三日目。他の艦と艦隊を整え、戦争がはじまる。

2

淡く、輝く。

ぼこぼこと沸き上がり、押し上げ、弾けて消えて、また沈み、また上がる。

僕はニューロンの神経網を見る。それは黄金色。

随所で起きる、雪景色のような爆発。スパイク発火。閾値を越えて、感情を生み出す。

伸びたシナプスの先、イオンチャンネルが開き、神経伝達物質が流れていく。その美しい光の輝きを眺める。

このまま、この金色の網に絡め取られ、溶け込んでしまえたら。その誘惑はいつでも僕を甘くとろかせている。それができたとき、本当の意味で、僕はタケミカヅチとひとつになれるだろう。

現実の僕の口が、無味乾燥な情報を吐き出す。

「エンゲージ。距離200」

僕はオペレーターだ。外の世界がどれだけ暗くて、色彩に溢れ、重く、圧迫感に満たされていても、いずれはそこに還らなくてはならない。でも、このオペレーター席に座っている限り、僕はタケミカヅチと接続してられる。無骨な金属の殻の内側にある、壮大な輝きに満ちた世界へアクセスできる。色々問わずらしいことを考えたって、結局、僕はそれを望んでいるだけ。その望みを果たすために、普通の人間の振りをしながら、生きているだけだ。

「第三戦速まで加速。主砲、砲門開け」

ジーク艦長の落ち着いた指令。

操舵手のトウキが加速し、砲手のキリエが射撃準備を完了させる。すべての情報、艦内の動きは、リアルタイムに僕へフィードバックされる。それだけじゃない、外部をセンシングするあらゆる計器の情報が、僕の目となり、耳となる。

さあ、手を伸ばそう。

もう、すぐ、すぐ、すぐ、届く。

「距離150。射程圏」

「エイミング完了！」

威勢のいい、キリエの報告。ちよつとだけ現実へ引き戻される。またすぐ潜り込む。離さない、そっちへ行くことは許さない、そうタケミカヅチが言っている。

「てえっ！」

艦長の鋭い命令が飛ぶ。この人は本当に、状況による適切な変化がうまい。なにも感じていないのに、ただ計算されたプログラムと裏打ちのあるロジックにしたがって動いているだけなのに、この場の空気と言うやつに、これ以上ないくらいマッチして、なにもかも――巻き込んでいく。

キリエは撃ち。

トウキは舵をきり。

僕は見届ける。

主砲が発射され、遠雷のような音が響き渡り、メイン・モニターにCG描写された邪神の身体へ穴が空いて、艦が流れる。爆散。僕の口が、また、水銀のような言葉を吐く。

「攻撃評価。発射弾数3、命中3、対象は消滅」

ああ、こんな、まどろっこしい。

もっと、速く、大地を踏みしめるように、近づいて。

握り締める、剣の柄の、無骨な感触に、歓喜しながら。思い切り振り下ろす。風を切る。

そして、打ち砕く。
完膚なきに。

憎しみも、怒りもなく。
純粋な膂力を込めて。
ただ壊し、滅する。

それだけの行為。

ばらばらになった破片を踏みしめる。

狩りを愉しむ獣のように。

そこには、名誉も、欲望も、ない。

すみきった、きれいな、破壊衝動。それだけ。

「さあ……」

小さくつぶやいた。これは浮かび上がった泡の飛沫。寝言のようなもの。

さあ、次は、どれだ。僕は見る。目を見張って闇を見渡す。その結果が、メイン・モニターへ表示される。邪神の身体が黒いからって、いちいち、CGにして形を作らないと安心できないなんて、人間はなんて臆病なのだろう。そんなことをしなくても、あいつらを壊すことはできるのに。

「敵影発見。距離、X2000、Y300、Z0。中型と推測。先行偵察艦の情報を待ちますか？」

仕事をこなす、この瞬間だけ、僕は浮かび上がる。息継ぎをする。イルカのように。結局、僕も哺乳類。潜りっぱなしではいられないでもきつと、イルカだって、好きにしていると保障をもらえたら、二度と浮かんでこないはず。

「いえ、速度そのまま、左舷ミサイル準備」

淡々とした指示が終わる前に、キリエが作業に入ったのがわかった。艦体の左にあるミサイルポッドに、命がこもる。産声を上げる用意が整う。タケミカツチは、速い。鳥のように速い。みるみるうちに駆け寄っていく。このまま、体当たりできないのが、残念で仕方ないくらいだ。計算された角度で舵が切られ、ちょうど、カーブ

のアールの頂点で左舷が一番近い位置にくるように、接敵する――。

「SSM発射！」

「SSM発射！」

艦長の号令を、キリエが復唱し、スイッチが押される。ポッドの爆砕ボルトに火が付き、蓋が跳ねあがって、それよりすこし前に点火されたブースターがミサイルを押し出し、生まれ落ちる。ミサイルは目標への距離を縮めながら、搭載されたコンピューターが最適な侵入角を計算し、センサーが邪神の位置を測定して、邪神がそれを妨害しようと発するECMをECMで妨害し、ジャミングを跳ねのけ、飛散するチャフ状の体組織をかわし、短い旅を終える。タケミカツチはそのころにはすでに背を向けていて、僕だけがそれを見送る。

「SSM命中。信管の起動を確認。攻撃評価可能まで、十秒」

「必要ありません。進路そのまま――」

「左舷に小型邪神！」

トウキの叫びとともに、ぐん、と身体が引つ張られる。スラストーを全力噴射して、急速転回を試みたのだ。重力制御された艦内でもこれだけ感じ取れると言うことは、相当のGがかかったはずだ。見落とした。特に小さな連中は、レーダーやセンサーをくぐりぬけて接近してくることがある。もちろん、策敵は僕の主な役目じゃないから、責任を感じる必要はないのだけれど、申し訳なく思う。だれに？ 艦にかもしれない。

「重力バリア、局所展開！ 急げ！」

命令に従って、僕はバリアを展開させる。開いたままのミサイルポッド付近を特に急いだけど、間に合わないかもしれない。邪神は一匹ではなかった。小型の連中は群れているから、想定内のこと。半分は制動で振り切って、半分はバリアではじき返したけど、残る半分が艦体にとりついた。装甲部分に取りつかれたなら、電流を流して排除できるが、武装付近は無理だ。数十秒で内部に侵入される。僕はそれを計測する。

「入りこまりました。人型クラスの邪神が数体。おそらく、三」

「キリエ・ラシャ少尉。白兵戦闘用意。五分で殲滅し、戻ること」

「アイサー」

「砲手は私が代わります」

キリエはすばやくブリッジを飛び出し、副艦長のサクヤが砲手席へ座る。

「速度落とせ。巡航。マクベス准尉、艦内のモニタリングと少尉のバックアップに専念し、逐次報告。隔壁はいつでも下ろせるように」
「了解」

隔壁を下ろせば、もちろん、キリエは戻ってこれない。戻ってくる必要がなくなったら、要するに、任務に失敗して、邪神がさらに進行しそうなら、下ろすと言うことだ。キリエの生死は問題じゃないから、冷徹な判断を要求される。だけど、ジーク艦長は書棚に本を戻すみたいにやってのけるだろうし、僕はそれに従うだけだ。手紙を受け取るのより簡単な作業。その内容は、最悪に違いないけど。キリエのバックアップに入れとの指令なので、通信する。でも白兵戦に関して素人の僕ができることは少ない。せいぜい、敵の位置と距離を教えるくらいだ。あと、余計なおせっかいを焼くのも。

「キリエさん、装備は？ できたら、あんまり二次被害を出さないでほしいんですけど」

「あんだ、ちょっとはあたしに気をつかうとかないわけ？」

案の定、呆れたように返される。僕は微笑んで言う。微笑みも伝わればいいのに。

「だって、キリエさんがだいじょうぶなのはわかってますから」

『うまいのね。装備G。追加はなしよ。弾は9ミリ。通常弾』

「了解です。3 A区に入ってください。ミサイル発射装置の機関付近です」

すでに左舷下部をキリエは走っている。どうやったらあの短時間で武装を整え、そこまで移動できるのか、まったく理解できない。あとで廊下の感圧記録でも見てみようか。

「近いですよ」声に緊張がこもるのがわかった。他人ごとだけに、なおさらだ。「あと十メートル。次の角です」

『オーケー。突入する!』

「ラシャ少尉、交戦に入ります」

艦長へ報告。返事はない。廊下の監視装置を注視する。敵は三体だった。屋根瓦みたいな体表の、真っ黒いヘビを思わせる、二メートルほどの邪神。走り込んだキリエが相対。腰だめにしたサブマシンガンを放つまで、コンマの秒数しかかからない。

次の瞬間、予想外のことが起こった。

あの位置、あの射角なら、間違いなく三体ともともに弾を受けたはずだし、実際、映像ではそう見えた。だが、邪神がはじめて消えるタイミングで、突如、すべてのモニタリングが不可能になったのだ。墨で塗りつぶされたみたいに、その区画に据え付けられたあらゆる計器が作動不能に陥った。

「艦長!」

僕の叫びで、ジークは状況を悟ったようだ。すばやい指示。

「トウキ、現場へ。急いでください。副艦長は操舵を」

隔壁を下ろせ、と言われなかったことに若干安堵する。そこまで早計じゃない。キリエよりもすばやくトウキが飛び出していき、その間に、僕はタケミカヅチへ深く潜り込んで、何が起こったか把握に努める。それはすぐにわかった。強力な電磁波を感知できたからだ。つまり、電子機器が、その電磁波でダウンしていた。原因はやはりあの邪神だろう。あれが破壊された瞬間、電磁波を撒き散らしたと見るのが正しい。

「艦長、トウキさん、聞いてください」僕は状況を説明する。それが終わった後、トウキが吐き捨てた。もうだいぶ先の通路を走っているようだ。

『くそつたれ! やべえぞ……』なにがそんなに危険なのか、その声はひっ迫している。『電磁波はまだ残留してんのか?』

「ええ——でも、瞬間的なものですから、すぐ消えると思います。」

でも左舷のミサイルはメンテナンスしないと使用できないでしょうね」

「EMP爆弾か……」

ジークは珍しく、難しい顔で顎に指を当てている。よほど、想定外の事態が起きない限り、この表情は見られない。だから現状は、それだけ深刻なことだ。EMP爆弾はエレクトロマグネティック・パルス・ボムの略で、電磁波を爆発的に発して電子機器を損壊する兵器の総称。あの邪神はEMP爆弾みたいなものだったと捉えたのだろう。

総合的にみて、戦局は現在、連邦軍が優勢だ。圧倒していると言ってもいい。だけど、なにか、全体の戦況にまで暗雲が垂れこめたような、いやな予感がしはじめていた。消滅の直前に電磁波を発するような邪神は、これまで存在しなかった。新種だ。新しいタイプの邪神など、ここ数年、まるで発見されていない。そんなレアケースにたまたま行き当たったのだろうか？ それとも……。

『こちらトウキ。キリエが負傷した。救護室へ人を回してくれ。ちよつと、まずい』

まだ、映像は回復しない。

僕は眼を閉じて、心の中の黒っぽいものを、噛み潰した。

3

意識が戻った、と聞いたので、僕はキリエを見舞いに行った。二日後のことだ。戦争はまだ続いていて、連邦軍は押し続けているみたいだけど、タケミカヅチはミサイル発射機構に受けたダメージが深刻で、いまだドッグ艦で修理中だった。キリエが移されたのも、ドッグ艦の特殊救護室だ。

だいじょうぶ、みたいなことを聞いていたから、キリエの片腕がなくなっているのを見て、僕は心底驚いた。なにか言う前に、キリエは機先を制して、残った片腕を挙げた。

「気にしないで。もともと、作り物だったから」それから、自虐するように、「あたし、サイボーグなの」とつぶやいた。

感圧記録を見て、妙に重い人だな、とは思ったけど、女性の体重のことを気にするのは失礼なので、それきり忘れていた。サイボーグなら納得だ。つまり、電磁波をもろに受け、身体の機械が故障してしまったのだらう。キリエはベッドに腰掛けた姿勢で、なにが起こったか説明してくれた。

「左腕の、ひじの辺りに、こう、こんな感じで発射する、ショットガン機構があっただけで、電磁パルスで誤作動起こして、内側で暴発したの。それ以外はもう、特に問題ないみたい」

「あんな邪神がいるなんて、ほんとに……」こんなとき、言葉は不便だ。表情や声色や、いろんな要素が情報を阻害する。「元氣そうでよかった」

「無理に、用意したセリフをしやべらないで」キリエは苦笑する。

「どれくらいで復帰できます？」

「腕は、もう、しょうがないから、肩からはずして、汎用のパーツをくつつけるつもり。スピアは地上に戻らないと、用意できないし。まあ、最悪、マニピュレータをつないでも、仕事はできるようにするから。三日待つて」

冗談めかして笑った顔が、普段どおりだったから、僕も笑い返した。普段どおりじゃないのに、普段どおりに笑えるってことは、普通じゃない、無理をしてるってことだ。それがわかったから、僕は安心することにした。つまり、僕に気をつかえるくらい、元氣。

それからすこし、世間話をした。もちろん戦争の話だ。

作戦の進行状況、味方の被害、敵に与えた損害、刻々と変化する状況の推移――。

どれも上滑りしていた。

「嫌じゃない？」すこし会話が途切れた後、キリエは上目遣いで、僕をうかがった。身長の関係上、いつも見下ろされていたから、そんな目は初めて見た。「あたしが、サイボーグだったことで、なに

か変わった？」

「いや……そんなこと、ないと思うけど」キリエにとってそれは、触れてほしくない話題のようだったので、回避しようと短く受け答える。

「本当に？」

でも、食いついてきた。傷口をもっと見て、と言わんばかりに。この場合、どうするのがいいのだろう。だいじょうぶ、ひどくないよと慰めるべきか。見たまま、感じたままを、写實的に伝えるべきか。それとも、今夜が峠だと脅すべきか。

「僕には、わかりません。わからないことが多くて」

ああ、目の前の相手が、アシリアだったらよかったのに。あの人なら、どんな言葉足らずでも、正鵠を射るように汲み取って、理解してくれる。でもそんなことを他の誰しにも求めることは建設的じゃない。必死で語彙を漁るけど、言葉と感情の組み合わせは、何万何千とあつて、どうしてこんなにプログラムのじゃないんだろうと、半ばうんざりする。機械なら、正解は数通りしかないのに、人間だと、無数にあつたり、そもそも存在しなかったりするのだ。

「ごめんね」結局、僕が考え込んだのを見て、キリエが引いてくれた。「コンプレックスなの。望んでなかった身体じゃないから。教えてなかったのも、ルーン君を信用してなかったんじゃないかって、あたしのつまらない意地」それから、重石を吐くみたいなため息。「でも、怖かっただけかも。意地は張れるのに、意気地は無いなんて、変だよな」

それは単なる言葉遊びだ。僕は視線を下へ向けたキリエの銀髪に、手を置く。それを滑らせて、頬へ。僕は男で、キリエは女だから、こう言う雰囲気するとき、どうすべきかはわかっている。そう、言葉を捜すより簡単簡潔なこと。

頬に当てられた僕の手のひらに、身体全部の体重を預けるようにして、キリエは目を閉じた。こうやって人はときどき、過負荷で焼けかけたバランスを冷却する。そうしないと、すぐ方向を狂わせ

てしまう。どっちを向いているかわからなくなって、あさつての場所へ飛んで行ったまま戻れなくなったり、地面に墜落したりする。そう言う点では人間も機械も同じなのかも。

「あつたかい」そう言ったキリエは、微笑んでいるように見えた。もう、安堵しているようだった。僕の手のひらが持つ体温に、そんな効果があるとは驚きだ。今度、自分でも試してみようか。でも違った。ささやくように、うすい唇が動いた。

「ルーン君の心が」

「心？」

「そう。熱すぎず、冷たすぎずに、ちょうど、あつたかい」

ちんぷんかんぷんだ。こう言う機微に、僕は特に疎い。どう言う意味か訊ねてみたかったけど、とても、心地よさそうにしているの、遠慮をする。代わりに、今度アシリアと会ったら、質問してみる必要があるな、と、胸の中でメモを取った。

「ごめんね。ありがとう」

キリエは顔を離すと、軽く手の甲にキスをして、自立した。瞳は潤んでいないようだ。よかった、泣いてなくて。これ以上、わからないことが増えると、今度は僕のバランスが焼けてしまいそうだ。それからすこし、ふっ切ったような顔をして、キリエはひとりであなづいた。

「うん。ね、ちょっと、身の上話を聞いてくれない？」

「はい」

「あたしとトウキつてね、孤児だったんだ」ベッドの上で膝を抱えた。僕も立ちっぱなしではなんなので、そのとなりに腰かける。

「子供の頃は、もう、ほんとひどいところで、なんとか協力して生きてた。被災地区のすぐそばにあるスラムね。いまはもう、世界中探したってそんなところはないけど、十年くらい前はまだ政府の管理が甘くて、けっこう社会保障の網からこぼれた人たちがいた」すこし言葉を切る。整理しているようだ。整理しないと話せないようなこと。「そのうち、あたしは誘拐された。おさだまりの、臓器目

的の営利誘拐。EM細胞やヒトブタから臓器を生成できるし、あるいはサイボーグ化の方法があるって言っても、それに頼れないケースがあつて、そう言う場合に新鮮な子供のパーツは需要があるわけ、あたしはバラバラにされた」

「ばらばら？」

「文字どおり。注文があつた部位から腑分けされて、順々に売られていった。最近の延命技術ってすぐてね、まともに残つたのは脳と脊髄くらいだったんだけど、それでもまだ生きてたの。生かされていた。新鮮さつて大事だから。で、ギリギリのところでは連邦政府の介入があつて、助け出されたつてわけ」

「じゃあ、サイボーグになつたのは」

「そこからは逆の手順よ。失つた部品を機械で埋めていく。研究所に連れていかれてね、あたしみたいな状態はレアケースだったみたいで、まあ、人命救助の名を借りた、人体実験よ。この身体、ほとんど全部が機械。機械化率80%を超えるサイボーグなんて、あたしだけなんだから。適合できたのはただの奇跡。あとは――」ふと虚しさを覚えたように天井を見上げた。僕も見上げたけど、そこにあるのはぼやけた照明だけだった。「あたし自身の超人的な努力で、この身体を使いこなすところまで復活した。それでいまに至る」

「あれ、トウキさんは？」

「ああ」苦笑する。「実は再会したのつて、軍に入ってからなの。兄が生きてるなんて、全然思つてなかったし、氣にする余裕もなかったからね。あいつも苦労したみたい。お互いなにがあつたかなんて、話してないけど、それが兄妹の氣遣いつてやつ。この話、人にしたのは、ルーン君がはじめてよ」

「え、なんで、僕に？」それは驚いた。

「なんでだろうね」抱き寄せられた。キリエは大事なぬいぐるみを抱えるみたいに、僕に力を込めた。「あたし、もう、ほら、わかるでしょ？」

「うん……」声が震えていて、僕には、キリエが泣こうとしている

のだけがわかった。

「自分がもう、人間じゃないって、そんな気がして。何度も死のうと考えたけど、あたしにはいつの間にか、あたしを気遣ってくれる人や、逆にあたしが気遣いたくなる人がたくさんいて、それはなんて幸せなことなんだろうって――」

「そうかも」

「だから、生きていくんだ。きっと生きていけると思うから。あたしが何者でも」

「キリエさんは、キリエさんですよ」

「うん……。ありがとう」触れ合った頬と頬に感じる、この冷たいものは、たぶん涙。でも僕のバランスーは焼けない。キリエが泣くために話し始めたんだってことは、途中からわかっていたから。

だから、すこしくらい元気づけないと。

「第二種人類バイオロイドや、第三種人類AI/アンドロイド。人だけでも三種類ある。この世界って多様化してきて、キリエさんも多様化のインフレーションのひとつだと思います。自分がわからなくなることもあるかもしれないけど、それって、僕も同じだから、少なくともひとりきりじゃありません」

「ルーン君も？」

「僕には五年以上昔の記憶も過去もありませんから。それなら、僕は他の誰だったとしても同じこと。僕じゃないかもしれない。でも僕は、なぜだかちゃんと、確定的にここにいる。それ以上のことは、必要ないのかなって」

「悩んでないのね」

「気にしてないだけです。人工的に作られるアンドロイドだって、ちゃんと人としての自覚があって生きているけど、たぶん、悩んでないと思います。それは気にしてないから。突き詰めれば、人間だって同じことなのかも」

「そうね。そう言う考え方……。視野が広くて、いいかな。ちょっと楽になれそう」

「よかった。役に立てて」

「でもね、一番いいのは、こうやって触れ合うこと。あたしが、あたしなんだって。他人のぬくもりを鏡にして、よくわかるから」キリエはもう一度、力を込めた。「きつと千の言葉よりも」

そのぬくもりは、僕も嫌いじゃない。

甘えるのも、時々いいんだって、そう思っている。

世界はそのため、あつたかくなつたんだろう。

4

戦争は順調だったけど、タケミカツチはまったく逆だった。もう修理はとくに終わったのに、発進許可がなかなか下りない。ドッグ艦だつてスペースは無限じゃないから、次々入ってくる傷物の軍艦に押しやられて、いまや美しい青の艦体は、荷物みたいに隅へ転がっていた。とても屈辱的だ。

この三日間、妙に周囲が落ち着かなかった。ジークは何度も上層部に呼び出されて、なんだか不機嫌そうだったし、中間管理職のサクヤはもつとバタバタしていた。暇そうなのはトウキだけで、整備士と賭けトランプをしたり、ドッグ艦の事務員をナンパしにいったりと、でも、あれはあれで忙しいのかもしれない。だとすると一番暇なのは僕だったりするのかも、と考えて、ちよつと憂鬱になった。午後にはタケミカツチの食堂へ行つて、アーリイと会った。半日ほど遅れたけど、キリエの復帰が決まつて、夕方にでも戻ってくるらしいから、その報告だ。いずれ誰かが教えてあげるに違いないけど、たぶん、僕が適任だろう。こう言う、人と人との橋渡しは、積極的にやった方がいいって、昔だれかに言われた気がする。

でも、アーリイに、もうキリエは仕事ができるくらい良くなったと報告すると、とてもうれしそうに笑ってくれたから、結局、僕はこの笑顔が見たかっただけかもしれない。理由をつけてまで、なにかしたい、なにか見たい、と言うことは、タケミカツチに関するこ

とを除いて、あまりないことだから、この気持ちは大切にしないで
はならない。きっと、僕にアドバイスをくれた人だって、そう言う
だろう。

しばらくすると、サクヤが食堂へ現れて、先を越された、とあか
らさまな顔をした。

「もう聞いた？」

《はい。キリエさんの快気祝いを、なににしようか、考えていたと
ころ》アーリイは微笑んで指文字で描いたタッチパネルをかざした。
「アルコールでしょうね」サクヤも微笑む。それから、急に表情を
曇らせて僕を見た。「ルーン君、あなたのことも探してたんだけど
……」

「僕ですか？」意外だった。そんな表情で探されるいわれがなかつ
たからだ。

「ええ。諜報部がうちに来て、あなたの引渡しを要求してきた。艦
長からはなにか指示を受けてない？」

「いえ……特に」

「そう。待たせてあるから、会議室へ行つて。断りたかったけど、
嫌疑が嫌疑だから、取調べを拒否できなくて……」

「嫌疑……。それって、なんですか？」まったく、わけがわからな
い話になってきた。

「情報漏洩よ。スパイと接触している可能性があるとか」

「スパイ……」

《そんなこと、ありませんよね。ルーン君》

「はい。まあ、なにかの勘違いだと思います。もしかして、タケミ
カズチが飛べないのって、そのせいですか？」

「うーん、色々と、他にも……。砲手だって、代理を頼むより、キ
リエにやらせたかったのもあるし……。とにかく、ちょっと、なに
もかもが、今複雑」

いやな感じだった。どうして人間はすぐ横を向いて、突っかかる
のだろう。倒すべきは邪神で、そんなことはわかりきっているはず

なのに。みんなで走って、みんなで殴りかければ、もっとシンプルに戦争は終わるんじゃないだろうか。

《お夕食、カレーにしましょうか》

僕の不機嫌が伝わってしまったらしい。アーリイが好物を挙げて、につこり笑った。こう言う気の遣われ方をしては、僕もしかめっ面を維持するのは難しかった。うなずいて、立ち上がる。

「ありがとうございます。それじゃ、行ってきますね」

きつと、すぐに終わる。鳥だって、翼を休めるときは、枝に留まる。でもまた、飛び立っていくのだ。そのときに、僕がいなくて……。

会議室では、無言の黒服がふたりいて、そのうちの片方をどこかで見た気がしたけど、連れて行かれた先へ到着するまでに思い出せなかったので、僕も終始黙っていた。なにか、殺気立っていて、ときどき僕を見る目がおかしかった。

タケミカツチを出た時点で、嫌な予感はいったけど、まさか、ドッグ艦をも出るとは想像しなかった。

ちょうど、補給のために第三師団の旗艦であるアメノオハバリが停泊していて、そこに連れて行かれた。どこをどう歩いたのか知らないけど、小ぢんまりした客間みたいなところへ通されて、黒服たちは消えた。入れ替わりに現れた女の人が、なにか飲むかと言ったので、僕はアシリアに教えられた茶葉の銘柄を伝えただけ、そんなものはないらしい。だから、黄泉を詰め込んだみたいなブラック・コーヒーを注文した。もちろん飲むつもりはこれっぽっちもない。

コーヒーが到着して、いつここから邪神が現れるのだろう観察を始めたとき、また呼ばれた。次に向かった部屋のプレートには、豪奢に縁取りされた文字で、『提督室』と書かれてあった。旗艦アメノオハバリの提督は、つまり、僕の所属する第三師団の司令官であると言う意味で、簡単に表せば最上級の上司だ。

僕の代わりに、僕を連れに来た別の人がノックして、通された。「ルーン・マクベス准尉、お連れしました」

僕より偉そうな人が背筋を伸ばして敬礼しているから、僕もそうしなくちゃならない。残されたコーヒーの行方がちよつと気になった。宇宙での物質はどんなものでも貴重だ。なにかにリサイクルされるだらうけど、やっぱりそこから邪神が出てきたりしないだらうか。

「掛けたまえ」

正面の、ひと目でこの人が提督ですよ、と指し示しているような立派な椅子から、僕へ指示が下りた。固そうな金髪をオールバックにして、わざわざ額の傷を目立たせている。部屋には他に何人もの人間がいて、僕以外で一番若いのが、この提督だった。

ライア・ハイゼンベルク中将。

最年少の将官でまだ四十過ぎのはずだ。叩き上げの軍人で、見た目や性格を一言で表すなら、凄絶とか峻烈とか、激しそうな言葉が要る。超鷹派で知られ、特に連邦軍の若い人間に絶大な支持がある人物だ。たしか、キリエもファンだったはず。実際に目にして、テレビで見るよりも、強そうだと納得できた。

「さっそく本題に入ろう。マクベス准尉——」

僕が席に付くなり、話しかけてきたのは、野太い声の中年だった。目を向けると、声だけじゃなくて身体も太かったので、僕は嫌になつてライアでも見ていることにした。オールバック提督は、頬に拳を当てて、足を組んでいる。その崩した姿勢は、トウキに似ていると感じて、すこし好感が持てた。

「この女性を知っているかね？」

大事な宝物の蓋を開けるように、僕の前に突き出されたのは、赤毛のポニーテールが写った写真だった。なにを意味するのかわからないけど、知っている人だ。うなずいた。

「はい。クラティナさんです。苗字は知りません」

「クラティナ・レフィル。軍の最高機密エージェント組織『ヤタガラス』の一員でありながら、諜報活動中に寝返った、特級の裏切り者だよ」

「はあ……、」驚きがなかった、と言えは嘘になるけど、でも、あの人ならなんだって不思議は無いな、とも思う。「それは知りませんでした」

「この数年、我々諜報部が足取りを探ったがまるでつかめなかった。それが、マクベス准尉。君と会うときに限り、表へ姿を見せる。まるで無防備に！ 彼女といったいなんのために会った？ なんの話をした？ 諜報部が総力を挙げて監視しておるのに、なにひとつ情報を得られん。先日は負傷者まで出す始末……ん、失礼……」

声が高くなったことによりやく気づいて、小太りはわざとらしく咳払いした。諜報部の幹部なのだろう。もうすこしダイエツトしたら、仕事もうまくいくんじゃないかと思ったけど、たぶん勘違いなので、それについては黙っておいた。

「准尉」

いっしょに部屋に入った男に促される。嫌々言葉を搜した。乗り気じゃなくても、すぐに見つかるから、これは単純な問題に違い無い。こんな簡単なことも自分で解決できないなんて、こう言うのを表現するために、無能って言葉があるのだ。どうしてここにいる人たちは、それを言わないのだろう。

だめだ。やっぱり、機嫌が悪い。

ひと呼吸いれる。

「申し訳ありませんが、勘違いをしておられます。僕はクラティナさんと会っていたわけではありません。彼女とはほとんど話もしていません」

「准尉。説明は省いてしまったが、将官が出席する場での発言は、正確に行わないと罪に問われる可能性がある」横の男がいらぬ世話を焼いてくれる。

「正確ではありませんでした。会話はほとんどしませんが、メールはたまに來ます。えと……十日前、最後に会った日の夜にも、メールが届きました。その程度です」

「それは把握している」諜報部の小太りが汗を拭きながら、手元の

資料を読み上げた。「内容はこうだ。『私たちは海へいったことは無い。いったのは塩湖で、普通の海は浮き輪もなしにぶかぶか浮いたりしない。だから、海へいくときは浮き輪が必要だが、水が塩辛いのは本当なので、飲んでみたりはしないこと』……これはなんだろう？ 新種の暗号か？」

僕は、この男のことが心底馬鹿じゃないかと思ったけど、人間追いつめられて視野が狭くなっているときは、ぜんぜん回りが見えなくなるものだって聞いたことがあるから、面と向かって馬鹿ですよと教えてあげるのはやめておいた。このほうが人のためになる。

「そのままの文章です。その日は海へ行った話を聞きました。僕にその話をしてくれた人は、どうやら塩湖のことを海だっと思って違いをしていたみたいで、それを後から正してくれたんです。他意はないと思います」

「ではなぜ！ わざわざ、君が別の女と会うような偽装までして、表へ出てくる必要があったのだ、クラティナは！ それも、基地の真近くへだぞ」

「偽装？」理解を超えた単語がでたので、眉をひそめる。「申し訳ありません、意味が……」

「あの金髪の女だ。カモフラージュなのだろう。あれと会うのが目的の振りをしていた。実際はクラティナへ情報を渡していたのだ。違うか！」

帰りたい、と真摯に思った。僕の意を、言葉にせずとも読み取ってくれる人もいるし、慎重に伝えても、まるで汲んでくれない人もいる。この小太りは、要するに、そう言うことにしたいのだ。真実を知りたがっているのに、どうしてなにも見ようとしないのか、まるで理解の埒外だ。こう言うわからなさ、わからないままでもいいのだろう、きつと。

「僕はクラティナさんと会うのが目的ではありません。いっしょにいた、金髪の女性と約束していただけです。彼女は友人です。友人と会うときに、毎回、クラティナさんが付き添ってきただけです」

「ではクラティナが付き添うと言う、その女は何者だ！」

「名前はアシリア・セラ。八禍教団の巫女です」
はつかきようたん

「そのつまらな——」当り散らしかけた小太りの表情が、おもしろいくらい凍りついた。「な、なんだって？　なんと聞いた、マクベス准尉！」

「アシリアさん。八十禍津日神を奉じる、八禍教団の最高幹部である、邪神の巫女です。僕の友人です」
やそまがつひのかみ

しばらく、だれもしやべらなくなった。ピザ・トーストの上に落ちた蜘蛛を眺めるような目で、僕を見ている。ライアだけが頼杖を維持していて、さすが、と思った。さすがにつまらなさそうだ。

「海老で鯛がかかったな、大佐……」

別の髭を生やした男がぼそりとつぶやいて、部屋に染み渡っていた。

「そして早計だったわけだ。このまま、マクベス准尉を泳がせておけば、陸まで釣り上げられたかもしれないものを……」

ぼそぼそと、随所から非難が上がり始める。当の大佐——小太りは、真っ青だった。ダイエットできるかもしれない。

「尋問は以上とする」

ライアがそれを絶妙に断ち切った。場の空気を、裁ちばさみで切るような割り込み方は、ジークを思い起こさせた。この人も、艦長と同じように、できる部類の人だ。

「全員退出したまえ。准尉は残るように。個人的に話をしたい」

葬式の列みたいに、みんな出て行くと、思ったよりこの部屋は広かったんだと感じた。ライアは足を組み替え、机の上のフォンでコーヒーをふたつ持ってくるよう指示を出した。きつと、黄泉から吸い上げたような奴のことだ。

「馬鹿が多くて困る」無表情にライアが言った。同じ意見だったの
で、僕はすこし微笑んだと思う。「君はどうだ？」

「馬や鹿よりは鳥になりたいと思います」

「そうか」

ふつと笑って、でも、ぜんぜん目が笑っていない。人がいなくなつてから、急にライアは人間味をそぎ落としたように感じた。まずまず、ジークに似ていると思った。

それから、女の人がコーヒーを持ってくるまで、ずっと黙っていた。やっぱりコーヒーは真っ黒だった。

「八十禍津日神を知っているか？」ライアがコーヒーに砂糖を落としているのを見て、僕は若干安堵した。

「はい。この世の災いを司る、強力な邪神です。連邦の主神である天照大神より先に生まれた、邪神の中の邪神」

「それを奉るのが、八禍教団。人柱や生贄を許容する教義のため、邪教指定を受けてはいるが、基本的に奉ることによって災いを収めてもらおうと言う宗教だから、おとなしい部類だ。規模も邪教では最大級。軍部や政治家にも、ひそかに信者がいる」

それくらい、興味のない僕でも知っている。コーヒーに口を付けたライアは、すぐに唇を離した。案外、猫舌なのかもしれない。「アシリアさんの役目のことは、なにひとつ知りません」

だいじょうぶだろうと思ったけど、釘を刺しておく。ライアは僕が口を開いたことなど気が付かなかったみたい続ける。

「あくまで、表向きの話だ。なにごとにも裏がある。人間は欲望に裏打ちされた生物だ。邪教がはかったのには、理由があるのだ。もし、君が不治の病を抱えていたでしょう。それを直す術があると聞けば、どうする？ 答えなくてよろしい。きつと藁にでもするだろう。そして、事実、八禍教には地上だと直せない病を治す方法がある」

淡々としゃべるライアが、なにを言いたいのか読めない。無駄はしゃべらないだろう。ジークに通じる合理性を、僕は見出していた。「邪神は生命の法則に従う必要は無い。因果を無視し、治療をほどこすこともできる。本来であれば、地上でも可能なはずの治療は、黄泉でしか成功しない。生の国である地上で、助かる者が死に、死の国で生き延びる。矛盾だろう？ クラティナも、同じ矛盾を感じ

たはずだ。あれも、幼い頃から遺伝性の病に苦しんできた。まっとうに地上で生活を続けられ、二十歳まで生きられない身体だった」「お知り会いなのですか？」途中で口を挟むのは失礼だけど、怒ったりはしないだろう。ライアはうなずいた。

「おれも『ヤタガラス』の出身だ。闇の経歴だな。連邦最高会議室直属の部署で、要するに、天照の巫女の手駒たちだ。連邦なんて組織は、複雑な政治体系を取ってはいるが、実質、巫女の神託で動いている。この戦争も然り……」

首を振り、ゆっくりとライアは立ち上がった。大きい。トウキよりも背が高いだろう。天井に頭がつきそうだった。

「クラティナは邪神の組織を体内に移植し、元の身体よりも強力な肉体を手に入れた。元々、彼女の行為は裏切りではない。最初から八禍教団側の人間だったのだ。そのあたりを知らない諜報部が、先日、の強行作戦の失敗で躍起になり、ついに業を煮やした。そして君がここに呼ばれた」

なるほど……ライアは、僕が尋問を受けた経緯を、懇切丁寧に解説してくれていたわけだ。親切なのではないだろう。そう言う人種ではない。ジークと同じとするならば……。僕は訊ねる。

「では、いま司令と話をしているのは？」

「私は機会に便乗させてもらった。いずれ君とは接触したいと考えていたが、立場上こちらからは動きづらいものだ。私の頼みを聞いてほしい」

「はい。僕にできる範囲でなら」

「ジークフリード・ハヤカワは、『始祖AI』エニアリスを手に入れるだろう。それを奪うのだ」

「……それは、僕にできることなのですか？」

「おそらくは」後ろ手に組み、数歩あるいた。動物園のキリンが歩いているみたいだった。「君にしかできない」

「わかりました。やってみます」

「奪った後、どう使うかは、君に一存しよう。出来得るなら、私の

元へ来てほしいのだが」

「僕はタケミカツチと共に在ります。それがすべてです」

「だろうな。だから私は近いうちに、君を殺さねばならない。よろしい。話は終わった。退出したまえ」

別れを告げるとき、たいいていの人は後ろを向いている。ライアもこちらへ背を向けて、壁の地図を見つめていた。僕は立ち上がって、その馬鹿でかい背中に一礼し、部屋を出た。

すぐ近くの廊下に、コーヒーを持ってきてくれた女の人が立っていて、なにをしているのか、盆を抱えたまま、寒そうにしていた。会釈して通りすぎようとしたけれど、その口から漏れだした言葉が、僕の足を止めた。

「どうして……ふたりとも、あんな、仮面みたいな表情で、座っているの……」

僕らのことを言っているのだろうか？ 怖がっている。邪神を見たときの人間の表情に似ていた。だとしたら心外だ。唇の両端を適切な角度にまで持ち上げ、僕は笑った。上出来な笑みだ。

「だって、本当は何も、感じていませんから」

残念ながら僕の親切は、女性の恐怖を増したただけのようだった。

なんて言うか、このもやもやとしたものを振り払うのに、数日を要した。タケミカヅチに乗っているのに、これは珍しいこと。なにがそんなに引かかっているのか、片手間に考えてみたけど、あの小太りの脂ぎった人間臭さが染み付いているわけでもなし、復帰したキリエの腕が妙に白かった違和感でもない。

やっぱり、僕にしかできないから、サクヤはアーリイを守ってくれと、依頼したんじゃないだろうか。なら、僕は僕でしかできない約束をふたつもしってしまったことになる。どちらも、目的ははっきりしているのに、手段は漠然としていた。砂漠の上を歩いているみたいで、どっちへ行けばいいのかわからない。これがもやもやの正体。

アーリイとは何度も話した。アシリアは恋人と勘違いしたけど、実際の恋人がどんなものなのか知らないから、この気持ちがどれに属するものか、はつきりとは知れない。知ろうと言う気はなかった。アシリアに相談すればきつと怒られるし、他に意見を聞く適当な人物もない。本人に尋ねるのは愚の骨頂だろう。たぶん、みんなが言うように、母親に甘えているのだ。

タケミカヅチは三度前線に向かって、舐めるようにしてから戻ってきた。たいして戦闘の激しい宙域ではなく、三度のうち一度は、敵と遭遇すらなかった。まるで、手をこまねいているような感じ。人間は結果を急ぐ癖があると思うていたんだけど、その思想とはちよつと矛盾する戦いになっていた。違和感と言えば違和感。なにか、おかしい。

艦内で変わったことと言えば、輸送船がやってきて、人員の一部が入れ替えになった。替わったのは整備士や作業員で、戦争の途中

で急遽交代があるなど、変な話だった。なんとはなしに調べると、第三師団全体でこのような配置換えが行われたらしい。ライア提督に考えがあるのだらう。トウキはトランプ仲間がいなくなったと愚痴っていた。新人たちは一様に薄暗くて、無口みたいだった。

第一師団壊滅の報が駆け巡ったのは、さらに数日後のことだった。そろそろ戦争が終わるとうわさが流れ始めた矢先のことだ。それからは忙しくなった。

まず、せっかく修理したミサイルが使用禁止になった。どうやら、第一師団が攻勢を強め、大規模なミサイル攻撃を行ったところ、誘導装置がごとくハッキングされて、発射したミサイルが逆に自分たちを襲ったらしい。これによって第一師団旗艦タチカラが轟沈。指揮系統が乱れたところへ、なぞの大爆発が発生した。艦隊が居た宙域はなぎ払われ、生き延びた艦は全体の三割、そのうち無傷の艦は一割に満たないありさまだった。

情報が規制されているから独自に調べたところ、爆発の瞬間に四次元の発生が計測されていることがわかった。強烈なガンマ線の放射はタケミカツチからでも観測できた。これは電子と陽電子が大量に対消滅したという証拠で、爆発の正体が急激な空間の膨張であることを示していた。

いわゆる、ビッグ・バンが起こったのだ。

地上に神が降りるとき、依り代となる物質に降臨する必要があるけれど、黄泉は邪神の世界なので、その行為は省略される。高次元にいる邪神たちは三次元空間に直接現れ、そのとき、少なからず空間の膨張が起きるのだ。メートル級の邪神ならそれは問題になるようなものじゃないけど、キロ級ともなればすさまじい爆発となる。物理法則が曲がって、一瞬、神の出入り口の四次元が顔を出す。これをビッグ・バンと呼び、すなわち、超級の邪神が現れたことを指し示しているのだ。

情報は制限されていたけど、これくらい、その気になれば誰だって調べられるようなこと。

戦争は継続された。せつかく取り戻した、五年前の防衛ラインを、みすみす手放すわけにはいかないからだ。だれの決定か知らないけど、きつと、後悔することになるだろう。

第三師団は後方へ待機し、ミサイルに替わる武装へ換装してから順次出撃の運びとなった。とは言っても、ミサイルから誘導装置を外して、ただの噴進砲弾として使うだけのこと。命中させるにはかなり接近しないといけないし、技術も要る。間違いなくそれによってこちら側の被害は増大するだろう。

そんな作業のために、ドッグ艦に停泊して、十二時間待つことになった。

そしてその十二時間の間に、その出来事は起こった。

《ルーン君、あれを》

目の前にかざされたパネルの文字と、それからアーリーの指し示す先を見て、僕は少なからず驚いていた。

再出撃までは自由時間。タケミカツチにこもりっぱなしのアーリーを、気晴らしのつもりでドッグ艦へ誘ったのだが、思いのほか何もなくて退屈していた。ちょっとした歓楽施設もあったのだけれど、民間のじゃないから、どれも整数が整列しているみたいな店ばかり。ファーストフードの店先で、ぼうつとしてしまっていたらしい。ありとあらゆるスクリーン、モニタ、テレビが、ライア・ハイゼンベルクの顔を映していた。

きりりと引き締まった、そう、鷹のような瞳。額の傷は五年前の大戦で最後まで逃げずに戦った証だと言う話だ。それは伝説のように語られて、カリスマに箔を付けていた。

ライアが画面の向こうで何をしゃべったか、あまり理解できなかった。ただ、聞こえたのは、『離反』と言う言葉だ。戦争を続ける軍部の矛盾点を隅から挙げ、連邦の政治体制の闇を説き、体制の崩壊を叫んだ。

革命だ。

誰かが快哉の叫びを上げた。

それ以上の人間が、暗く黙り込んだ。

いずこかで、騒々しい音が響いて、絶叫が聞こえた。
とたんに周囲は騒がしくなった。

歓楽施設の端へ駆け込んできた男が、どこからか銃撃されて、丸太が転がるみたいにして倒れた。

上半身が肉団子みたいになっていた。

僕は人が死ぬのを間近で初めて見た。飛び散った血飛沫と、さつき食べたホット・ドッグのケチャップ、どっちが美しいだろうか、と言う感想を持った。

アーリイは真っ青になって震えていた。

その手をぎゅっと握り締めた。

いまこそ、懸案を解決するときが来た。

僕が、アーリイを守るのだ。

通信機が鳴った。逼迫した声でキリエが言った。

『ルーン君！ いまどこ！』

「ドッグ艦です。四区の歓楽施設。アーリイさんといっしょにいます」とにかく、人目に付かないところへ。手を引いて走りながら答える。「すこし遠いですけど、タケミカツチへ向かいます」

『急いでこなくていいから。こっちも、応戦中。入れ替えて入った整備士が、ライア司令の手先だったの。ブリッジを制圧しようと攻撃してきた』

通信の背後からは、銃声が響いている。

「だいじょうぶですか？ 僕たちはどうします？」

『こんなときに限って、トウキの役立たずは居ないし！ ブリッジの手前、艦長と副艦長と、三人でなんとか食い止めてるから。すぐに撃退してやるわ。あんたたちは艦の近くまで来て、隠れてて。あのへん、ごちゃごちゃしてるから、いくらでもあるはず。くっ——』

爆音。振動が通信機越しに耳の奥を揺らせる。

「キリエさん？」

『平気よ。ちよっと、手榴弾を投げ返してやっただけ』

「二次被害はできるだけ抑えてくださいね」

『馬鹿！ 冗談にもならないわ。いい？ 隠れていて。迎えに行くから』

通信が切れた。珍しくジョークに失敗したようだった。

アーリイが口をパクパクさせている。どうするの、と聞きたいようだった。僕はうなずいて、先へ進もうと合図した。

PDAで検索して、ついでにドッグ艦の監視システムの一部をハッキングし、できるだけ人のいない経路を選択した。

非常用の階段を下り、薄暗いトンネルみたいな通路を走っていると、まるでこの世に生き残ったのが僕たちふたりだけのような錯覚に襲われた。

もしここで、通路の両側の隔壁を下ろしてしまえば、本当にふたりだけの世界が完成する。ちょっととした、誘惑に駆られる。

アシリアが言っていたように、僕らが恋人だったら、そうしてみるのもいいかもしれない。ふたりの世界で死ねたら、きっと、勝ちでも現実の僕たちの勝ち負けはもっと先にある。だから走らなくちゃならない。

貨物区画へ抜けて、いよいよドッグに近くなる。ここからが難しい。隠し通路みたいな非常口はもうないし、自分たちの艦へ逃げ込もうと言う人々で人口が増える。敵も増える。おまけに経路をつかもうにも、壁はともかく、貨物の類は随時移動するから、記録がない。感圧計の数値を信用するか、あとは目視による判断だ。

でもまあ、ここまでは上出来。PDAは肌身離さず持ち歩いていたし、小型の拳銃も持っている。

真っ青だったアーリイは走ったおかげで頬に赤味がさしていた。きれいだな、と思う。こんなきれいな人は見たことがない。アシリアには悪いけど。

一角に逃げ込んで、コンテナの影に隠れた。光学兵器が持ち出されたのか、ドッグからはまばゆい光が漏れてくる。溶接光みたいな、目に悪い光。僕はそれを見ないように忠告しようと振り返ったけど、

アーリイはうつむいて目を閉じていた。なにかを口の中で繰り返しているようだ。お祈りの言葉だろうか。そんな気分のあるときもあるかもしれない。声にして伝えられなくても、伝えたくるときって、きつとある。

期を見て移動。タケミカツチのブルーの艦体が見えて、僕はうれしくなった。キリエはまだ戦っているのだろうか。本当に、できるだけ、艦の被害は小さいほうがいい。それは艦を構成する、僕たち人間も含めてと言う意味だけど。

意外に人気はなくて、これなら充分待っていられそうだった。背の高いコンテナの後ろに移ろうとしたとき、真上から人影が降ってきた。

僕は慌てて拳銃を取り出そうとしたけど、ガンマンみたいにはうまくいかない。もたついているうちに、頭を小突かれた。

「あたしよ」

「……キリエさん」背の高い銀髪を見上げる。気が抜けた。「おどかさないでくださいよ」

「ごめんごめん。上から監視してたの。行きましょ。トウキが戻ったら、すぐに発進。準備しなきゃ」

「はい」それから、アーリイに向かって微笑む。ぎこちないけど、返してくれた。

艦内の傷跡は悲惨だった。戦闘があつた場所では、リベットを打ったみたいな弾痕が壁に並び、前衛画家が絵筆で殴りつけたみたい。血が塗りつけてあつた。死体は目に付かないところへもう移動してあるみたいだけど、すぐ近くに転がっているのだろう。アーリイは引きつった表情でブリッジまでを歩いてた。憤っているのか、哀しんでいるのか、絶望しているのか、僕には読み取れなかった。ただ、握られた手の圧力だけが、力強い。

「無事でなによりです」

ブリッジに入るなり、ジークがにこやかに言った。黒縁のメガネは、ふちがすこし欠けてしまったようだ。でも七三分けは交差点み

たいに正確だった。

「マクベス准尉、戻りました。作業はどこから？」

「まあ、一息入れてから——と言いたいですが、まずエンジンを起動させないと。整備士がほとんど欠けたので、一発勝負です。調整をしてください」

すでにサクヤはコンソールへ向かって没頭していた。ブリッジには、他に非戦闘員が数名。アーリイを含め、まだ戻らないトウキを含めても、人員は半分以下に減ってしまったことになる。ショックを受けて、うつろな顔をしている人が多かった。

オペレーター席へ座り、タケミカツチへ触れる。

金色の伝達網は、キラキラと脈動していて、興奮しているようだった。僕自身の興奮かもしれない。

エンジンは問題なさそうだった。ブリッジ以外にも機関部に整備士がすでに入っていたようだ。始動の作業に入ると、すぐにかかった。問題なし。

「このままアイドリングを続けてください」

エンジン付近で作業をしている整備士にマイクで告げる。あつたまってきたらタケミカツチはいつでも飛べる状態になった。

順調に行くと思った。

「戻ったぜ」

ブリッジの入り口から、トウキの声がした。神経を集中していたので、まるで気が付かなかった。僕のすぐ脇に、アーリイが立っていて、コンソールを覗き込んでいたのにも気づかなかった。普段は立ち入り禁止だから、仕事の内容が珍しいのだろう。

「おかえりなさい——」

入り口を振り返って、僕が見たのは、銃を突き付けるトウキの姿だった。

「チェックメイトだ、ジークフリード・ハヤカワ」

銃口はジークの額へ向けられている。ブリッジへ、わらわらと戦闘服姿の連中が入り込んできた。なんてことだ。僕は絶望した。体

内に異物が入ってくるのもわからなかったなんて。集中しすぎたのだ。

「なんのつもりです？ トウキ。反乱罪に問われますよ」

冗談か時間稼ぎか、ジークのセリフは落ち着いている。何の感慨もないのだろう。でもジョークだとしたらやめといたほうがいいな、と思った。きつと怒られる。

「エニアリスを渡してもらおう」そう言ったトウキの言葉と、「あんな、なに考えてるの！？」キリエの叫び声が重なった。兄妹でも知らないことはあるらしい。

「うるせえ、黙ってろ、キリエ。こっちは工作中だ」シニカルに笑っている。「大事な取引の最中さ」

「取引ねえ……」ジークは苦笑する。「あなたが『ヤタガラス』の一員であることは知っていましたよ。ライア司令の部下であることもね」

「御託はいい。エニアリスはどこだ」

「ここに」案外素直に、艦長席から取り出した記録スフィアを渡した。半透明の球体で、中に海のようなものが見える。「お代は？」

「鉛弾でもくれてやるのか？ 目的は達した。引き上げるぞ」

トウキは戦闘員たちに告げて、ブリッジを出ようとする。数名は続き、それに従わず、数名は動かなかった。

低い声の奴が言った。

「ルーン・マクベス」

僕は思わず、その声の方を向いてしまった。それがいけなかった。ゴーグル越しの目と合ってしまった。

「ライア司令の命だ。死んでもらう」

「おい！？ お前っ」トウキの奇声。

握り締められる、制圧用サブマシンガンのトリガー。

ああ、終わりか、と思った。

きつと、あそこから放たれた、対人用の5.7ミリ弾は、僕の身体に着弾した瞬間、乱回転を発生させて、体組織をめちゃめちゃに

破壊するだろう。運動エネルギーは遺憾なく目標内部に発散されて、貫通性がないのが制圧用の銃の特徴だ。つまり、僕の後ろのオペレーターコンソールには、ダメージがないだろうと言うこと。外さずに当ててくれたらいいな、と思った。

だが、発射された弾は、結局僕には届かなかった。

金色の輝きが僕を覆い隠した。

それがアーリーの髪だって気づいたのは、銃声が鳴り止んで、その場がシンと静まり返ってからだった。

「怪我はありませんか？」

それがアーリーの声と理解するのに、僕は数瞬の時を要した。あんまりにもきれいで、澄み透っていたから。言葉だって認識できなかったくらいだ。

「え、あ——はい」

「よかった」

ぼたぼたと、腕のすそから、手首にかけて、液体がしたたり落ちている。

白い。

白い液体。

血液よりも粘つくくて、どろつとしている。血じゃない。

これは——アンドロイドの、循環液だ。

「ごめんなさいね。色々と、だましていて。私がしゃべると、みんな、痺れてしまうから……」

戦闘員たちは動かない。

動けないのだと、そのときわかった。

誰も動かない。

僕も。

僕も痺れているのかもしれない。

「ジークさん。ありがとう。こんな私を、ここまで連れてきてくださって。大切な人たちと、出合いをくれて」

「私はあなたを利用しただけ。感謝など、もつたいない話です」ジークはメガネの位置を直そうとしたが、うまくいかないようだ。

「私にくれた、役目を果たします。さあ、みなさん」アーリイは戦闘員たちに微笑んだようだ――。「私といっしょに消えましょう」

その唇が、圧縮された音声をつむいだ。

それは『言霊』。

コンピューターが演算し、出力することで発せられる、物理的行使力を持った、プログラム。

人間なら、機械を使わないと、言霊を操ることはできない。

それを生身で実行できるのは、アンドロイドのみ。

じゅわつと、蒸発するような音が響いた。

戦闘員たちは、外側の戦闘スーツを残して、水蒸気みたいに消滅した。

誰よりもやさしかったアーリイが、最期に道連れにした連中だった。

「アーリイさん……」

僕はおそろおそろ、正面に回りこんだ。

草原みたいな色のワンピースには、五ヶ所ほど穴が空いていて、そこからいまでも、どろどろと白い循環液が溢れていた。

目は閉じられていた。

表情は人形のように。

消えてしまった。

なぜだか、わかった。直感だ。

直感は、外れることはない。

ガリツと言う音。

トウキが歯噛みをした音だった。

「糞つたれが」

ジークを睨み付けると、そのままきびすを返し、通路の向こうへ消えていった。

放心した顔で、キリエが見送っていた。

「この人は、アンドロイドでした」しばらくしてから、説明口調でジークが告げた。「それも、対邪神用戦闘アンドロイドの、プロトタイプです」

「なんで……」キリエのつぶやき。意味のある言葉ではないだろう。「重大な、試験運用すら不可能な欠陥があつて、半ば放棄されていた人でした。みなさんも体験したように、彼女が言葉を話すと、自動的に言霊が生成され、撒き散らされるのです。しかも、自発的に言霊を発生させれば、その効果は望まずと強力で、反動により自らの魂をも消滅させてしまう。これは推測に過ぎませんでした、今の現象を見る限り、事実だったようです」

アミューズメントパークのコンパニオンみたいな声。無機質で温度がない。

僕はアーリイの頬に手を当てる。

あたたかい。

熱くもなく、冷たくもなく。

ちょうど、あたたかい。

「私はある約束とともに、彼女を引き取りました。もし彼女が消滅することがあれば、その抜け殻を利用する。代わりに、それまでは自由に、人間のように、生きていて良いと。こうして、タケミカヅチの一員に、彼女はなりました。そしていま、約束が果たされることになります。私はこの言霊演算機の電腦に、エニアリスを移植する」

ジークは記録スフィアを取り出した。渡したのは偽物だったみたいだ。なんで調べもせず、トウキは持ち帰ったのだらう。ほしくなかったのかもしれない。

「ライア司令を止めるには、エニアリスの力が不可欠だ。残酷に感じるかもしれませんが、それだけ重要なことなのです」

そう——残酷だ。

ジークはこの状況を作ったのだ。

アーリイが自分から、言霊を発生させる状況を。

サクヤを使って、僕がアーリイを守るよう仕向け、反乱が起こっても無傷で届くよう仕込み、トウキの行動も見込んだ上で、襲撃させた。おそらく、推測だけど、サクヤはアーリイにも、同じことを言ったのではないだろうか。僕を守ってやれと。

もしかしたら、僕をかばってアーリイが撃たれたのは、ほんのすこしの、抗議だったのかも。なにかもは、思い通りにならないって言う……。

それならば、僕は。

約束したことは、守らないと。

「さあ、アーリイを電算室へ。準備は整えてあります。准尉、名残惜しいかもしれませんが、急ぎます。離れて——」

僕はポケットに手を入れ、拳銃を引き出した。

今度は、指先が吸い付くみたいに、取り出すことができた。

しっかりと向ける。突きつける。ジークへ。

「この人は渡さない」これが、僕の、懸案の解消。「好きにはさせない。僕が、守ります」

「反乱罪ですよ」呆れた声。でも、予想外だったってことだ。「怒っているんですか？」

「はい」

「ではなぜ、笑っているんです」

「笑う？」

「ええ。あなた、いままで見た中で、一番うれしそうですよ。そんな顔だ」

笑っているつもりはない。

でも、そうなんだろう。

僕だって本当は、何も感じていない。

感じていないから、どんな表情が表に出ているかなんて、すぐに忘れてしまう。

だけど……。

なんで、こんなに、くやしいのだろう。

何も感じていないのに、くやしいのか。
感じないことが、くやしいのだろうか？
違う。きつと。

きつと、守れないことが、くやしいのだ。
僕はそう言う役割じゃない。

半月も前に、答えが出ていることだけど。

でも……、すぐく。

くやしかった。

2

暗い部屋に押し込められた。

部屋が暗かったわけじゃなくて、僕が明かりを点けなかっただけ。
数時間してから、サクヤが入ってきた。トレーには食事が乗って
いて、レトルトだった。カレーだったけど、僕がレトルトのカレー
を嫌いつてことは、知らなかったらしい。でも、気遣いには感謝し
ないと。絶対に食べないけど。

「ごめんね」

いくつかのパターンが予測されたけど、サクヤが発したのは、も
っとも当たり障りのない言葉だった。

「いえ」そして、沈黙。シュミレーション通りの展開。

すぐとなりには、サクヤが腰を下ろす。また、桜のような香り。

「なにか、埋め合わせをしたい」

「そんな……、」僕は首を振る。「サクヤさんが、責任を感じるこ
とじゃ」

「私、知っていたから。知っていて……、いえ、気づいているよね」

「はい」トウキでもわかっていたことだ。僕を利用したことだろう。

「でも、それでも……」

「誰かが、憎くはない？」

「憎い？」

「私が。艦長が。司令が。撃った人が。漠然とした何かが。憎くはない？」

「特に」

「本当なら、憎しみを覚えているところよ。私ならきつと、気が狂いそうなくらい、泣き叫んだかもしれない。あなたがつけたのは、それくらいの仕事」

「そうですか……」ため息。だから、どうしたって言うのだろう。

「だから、そう、たとえば」

「なんですか？」

「私を、抱いたっていい。それですこし、あなたの気が晴れるなら僕はとなりに目を向ける。」

サクヤは私服で、暗いからわからないけど、薄い衣装を着ているようだった。

首を振る。もう一度、横へ。

「いえ……、その、ありがとうございます」

「そう。ダメね、私って」

「あの、サクヤさんに魅力がないわけじゃないんです。でもそう言うことすると、怒る人がいるので。それだけです」

「あら」サクヤは微笑んだ。「知らなかった。ちゃっかりしてるのね」

「恋人じゃないんですけど。ちょっと、嫉妬深い人で。そう言う部分も好ましく思ってますから」

それからしばらく話をして、サクヤは出て行った。アーリーの話はしなかった。僕もサクヤも、避けていたのだろう。おかげですこし、気分がマシになったようだ。でもまだ、明かりを点けようと言う気にはならなかった。

僕にとってアーリーはなんだったのか。

愛情を感じていたのだろうか？

人の言う、好きや愛にはいろんな種類があって、僕にはそのどれを当てはめていいのか、さっぱりわからない。

友愛。

博愛。

恋愛。

自分自身のことなのに……。

僕はなにも感じない。

だから、なにもわからないんだ。

理解しようとして、必死に人の真似事を繰り返して。

それはざるで水を汲もうとするくらい、無益な行為。

結局、なんにもならないって、そういうことだけはわかっている。だけど。

いいじゃないか。

僕が僕であること。

その努力をしてみたって……。

考え込んでいるうちに、いつの間にか、眠ってしまったらしい。

うとうとして、物音に目を覚ますと、天井から人の顔が生えていた。

僕はびっくりして大声を上げかけたけど、その人が口元に指を持っていって、黙るようジェスチャーしたので、なんとか押しとどめた。

「ここから出る」

そう言いながら飛び降りてきたのは、クラだった。この長い赤毛のポニーテールを、見誤るはずはない。

「なんで、こんなところに？」もうタケミカツチはドッグ艦を離れて航行しているはずだ。

「最初からいた。隠れていただけ」

まあ、そうだろう。妥当なところだ。聞きたかったのは理由。

「あの、僕を、連れ出しに？」うなずきが返る。「どこへ？」

「外」

「え」

「ミサイルの換装に合わせて、うちの手の者に、色々と細工をさせ

た。脱出艇の代わりに、中距離を航行できる小型艇を積んである。それに乗る」それから、僕を見た。「アーリイもいつしょにいく」心臓が跳ね上がった。クラは無口にならずいて、部屋のドアを開けた。一応、外から鍵をかけられていたはずだけど、そんなものはこの人には関係ないみたいだ。

「外って、どこです？」通路を走りながら訊ねる。クラとこんなに会話したのは、たぶんはじめてだ。「地上に戻るわけじゃないですよね」

「さすがに、それは無理。私たちの母船へ向かう。八禍教団の母船。アシリア様も待っている」

「アシリアさんが……」

クラは足音を立てずに走る。通路には僕が立てる音だけが響いて、無礼に当たるんじゃないかと心配になった。

「すこし、ここで待って」

電算室の前でクラは言い、やっぱりロックなんか最初からなかったようにして入っていった。時刻は深夜。タケミカツチは現在、ただでさえ人手不足だ。周囲にはだれもない。

アラートが鳴り響いた。どうしたのかと思っていると、すぐに、術衣を着せられたアーリイを担いだクラが現れた。

「警報が鳴るのは仕方なかった。すぐそこ。急ごう」

アンドロイドって、重いんじゃないだろうか。クラの足取りは変わらず、音も鳴らなかった。息切れするくらい、僕が全力で走っているのと同じ速度。

脱出艇は数ヶ所設備されていて、艦後部の作業員用のスペースが、目的地だった。見慣れない小型艇が鎮座している。偽装されていたし、昼間からのあの騒ぎでは、だれも気づかなかっただろう。

アーリイの身体を座らせて、固定するのに、若干手間取った。足音がいくつか、通路の向こうから響いてきた。

「待ちなさい！」

まず現れたのはキリエ。銃を手にしている。

クラがゆつくりと立ちふさがった。静かに言葉が投げかけられる。

「やめておけ。サイボーグでも、私には勝てない」

「っ！？」キリエが息を呑んだ。

クラは丸腰だ。ただ、向かい合って仁王立ちしているに過ぎない。でもこの威圧感を、なんと表現するだろう？

後ろにいる僕ですら、総毛が立ちそうだった。

歯の根が合わなくなる前に、僕は言った。

「あの、できればやめてください。ふたりとも、僕の大事な友達ですから」

「やられた。まったく、やられました」続いて、嘆きながら現れたのは、ジーク。サクヤも後ろにいた。「まさか、八禍教団が絡んできるとは。まったく――」

ジークはにこやかに笑っている。くやしくてたまらないから、笑っているんだろう。

「ルーンはこう言っている。できれば、穏便に出発したいが？」

クラのセリフを真に受ける人間はいないだろう。

ジークが悔し紛れみたいに言った。

「ルーン・マクベス准尉。そこに居るのはアーリイではありません。すでに、インストール済みの、エニアリスです。それでも、守ると言うのですか？」

「いいえ。別の人と、別の約束をしました。これはたぶん、それを果たすために必要なことです」

「それは？」

「エニアリスを、ジーク艦長から奪うようにと。ライア司令に頼まれました」

クラが僕を見た。自分の行動が図らずも、ライアの望みを果たすのと同じ意図を持っていることに、驚いたのかも。

ジークは大きいため息を付いた。全部の表情を吐息に乗せて吐き出してしまふかのようなだった。

「向こうが一枚上手だったわけですか。いいでしょう。行きなさい。」

あなたがまたここへ戻ってくることはわかっている」

「ええ。僕はタケミカツチと共に在ります。それがすべて」

それなのに、離れようとしている。おかしい話だ。なにかが僕を変えたのだろう。それが愛情だったらしい、と思った。

「やれやれ」ジークはメガネを外し、目をこすった。「みなさん、寝なおしましょう。解散」

キリエが銃を下ろし、口だけでなにか言った。がんばって、と動いたようだ。笑っていた。サクヤはなにともなかったかのように、ジークへ続いた。

「すこし、狭いけど、がまんすること」

小型艇に乗り込んで、クラは言った。

僕のためには、アーリーの形をした、そうじゃない人が、眠っていた。

3

「きれいな天気ですね」

思ったことを率直に言葉にしたけど、どうやら的外れな表現だったみたいだ。窓際のテーブルに同席するアシリアは、仔リスのような笑みを浮かべた。

「でも、わたくしは、本物の雨の方が好きですわ。ここのお天気は、どれもすこし、美しすぎて……」

なるほど、そう言う意見もあるだろう。

窓の向こうに降るささやかな雨は、絵画を流したみたいに、完成されている。

教団の母船は居住型の半宇宙ステーションのような船で、内部には人工による自然環境の再現がなされていた。

僕がタケミカツチを出てから、三日が過ぎていた。

八禍教団の母船に到着し、なんだかどっと疲れが出て、気絶するみたいに眠ってしまったのが一日目。

二日目はなにかの集会に呼ばれて、そこでアシリアと再会した。

数百人の人々にかしずかれ、神殿の壇上で祈りを捧げるアシリアは、たしかに僕が見たことのない姿。貫頭衣と言うのだろうか、布をかぶったような衣装を着て、そのまま夜空に上げれば星座になれそうだった。邪神の巫女なんて呼び名はまったくふさわしくない。もう二度と口に出さないようにしよう、と心に決めた。

それから僕がみんなに面通しされた。連邦軍きつてのハツカーと紹介されて、なんだか面映かった。そのとき軍服を着ていなかったからだ。教団にはやさしい人が多そうに感じた。きつと、祈るのが仕事だからだろう。戦うのを生業にしていたら、どうしたって、眉間にしわが寄ってくる。

それから、今日。

エニアリスの件でごたごたしていて、やっと時間が取れた、とはアシリアの談。エニアリスは身体の修理を終え、その他の手を尽くしても、目覚める気配がないらしい。母船の景色にも見慣れてきて、すこし退屈していたところだったから、話ができるのはうれしかった。

クラを抜きに、ふたりきりで顔を付き合わせるのって、たぶんはじめてのことだ。うすうすは思っていたけど、クラが片時も離れなかったのは、護衛のためだったのだろう。ああ、そうか。何日前、ライアのところへ連れて行かれたときの黒服。見たことがあると思ったら、アシリアたちをつけて行った連中のひとりだった。たぶんあのあとクラにこてんぱんにされて、それで機嫌が悪かったのだ。僕を睨んでいた理由が解決して、ちよつとすつきり。

「すこし、歩きましょう」そう言うってから、予定調和のように、アシリアは立ち上がった。紅茶が出なかったのは、元々そうするつもりだったからみたいだ。

連れ立って歩きながら、他愛のない話をした。

いっしょに散歩をするのも、考えてみれば、はじめてのこと。

こうやって、はじめてを解消しながら、人と人とは、親密になって

いくのだろう。

安全を考えれば、地上で暢気に歩くことはできない。ライアも言っていたけど、立場がやりたいことを阻害する。司令官の場合、僕と会おうとするのですら、問題が生じる。偉くなればなるほど、重要であればあるほど、立場つてものは高いところへ昇って行って、どうにも、動ける範囲が狭くなってしまふのだ。踏み外そうものなら、まっさかさま。

僕なんかは、まだ、頭がやわらかいせいか、そんな風になるくらいなら、偉くなんかなりたくないと思うけど、アシリアはどうも運命、と言つか、宿命のようなもの、それによって、その立場にいるみたいだ。それって、どう言う感覚なのだろう？　ちっとも推察できなくて、自分の未熟さに、自己嫌悪を覚えるところだ。やっぱり僕は、いろんな人に甘えながら生きて行く。まだ、その段階。

「このあたりは、あまり、調整を入れずに、自然に任せてありますの」

そう教えてくれたのは、苔むした原生林みたいな場所だった。背の高い樹はあまりなくて、さんさんとした陽の光が、葉に溜まった水滴や、小川の水面を煌めかせている。天候はすでに、雨上がりのフェイズに移っていた。

「ここからの景色は、好き。とても落ち着きます。なにかもが人工的でも、ちゃんと、自然は動いていく。わたくしたちも、そうあるべきだと、再認識させられて……」

「調べたわけじゃないんですけど」前置きしてから、僕は訊ねた。

「地上では助からない人たちを、ここで治療してるって聞きました」

「はい。時には邪神の組織を移植するやり方で。クラティナのことも？」

「ええ……」

「あの子はとても、可愛いそうな子供でした。筋肉が萎縮して行く進行性の遺伝病で、十歳のころにはもう立つこともできなかった。そのうちに、自立呼吸が不可能になって、人工呼吸器に頼ることに

なる。それでもすぐに、心臓の筋肉すら弱って……。どんな未来が待っているか、はつきりわかるって、それはそれは、苦しいことなんですよ。わたくしがはじめて会ったとき、腕にはもう何本も、切り傷がありました。死のうとしても、脈を切れるほどの力がなかったのです。結果的に、それがクラを生き延びさせましたけど」

色々と驚かされる内容だったけど、クラのことを、あの子、なんて呼び方は、はじめて聞いた。どう見たってクラの方がアシリアより年上に……。いや……。どうなんだろう？　いまだに、僕はアシリアがいくつなのか、見当が付かない。でもクラは二十台の中盤だ。これは自信がある。

「クラさんは、じゃあ、僕よりも小さなころから、ここにいたんですね」

「そうです。そして、クラ以上に邪神組織の適合がよかった人間はいませんでした。まるで、愛されたみたいに。そのせいで、色々と有用な人材になってしまって、いらぬ苦勞をかけ通しです」アシリアは苔の生えた岩の上に足を乗せる。滑らないか心配したけど、慣れているようだ。それでも声をかけるのが、礼儀ってもんだろう。

「あぶないですよ」

「ねえ、見てください。ほら」アシリアが岩の頂上で手を広げる。僕からは逆光で、金色のゆるやかな髪が、外側に向かうにつれ、光と溶けあうように輝いている。

それは、なんと言う光景だっただろう。一種の宗教的な美しさが、間違いなくあった。

神々しさ、のようなもの。

僕は、見とれた。惚けていたかもしれない。

それから、アシリアは不思議なことを言った。

「わたくしが、なにに見えますか？」表情は逆光に翳って、よく見えない。

「アシリアさんに」

「どんな形をしていますか？」

「人間の形を」

「そう。でも、わたくしは、人間ではありません」踊るように一回転。スカートがなびき、足首が見える。「人類、人には分類されるでしょうけど、ふふ、ルーンさん。もう何百年も、脈々と代替わりをしながら生きているって言えば、驚きますか？」

「ええ……」でも正直、不思議はないと思った。だって何歳なのかわからないのだから。

「わたくしは四倍体の染色体を持ち、並列に処理される魂をふたつ持っています。単為生殖で自分自身を妊娠し、魂を分けて、次の代を作る。そうやって続いてきました。これからも。そう言う存在を、巫女と言うのです」

「なんで、そんな話を、僕に？」

「あなたもそうだから」

「え」それは驚きだ。「僕、妊娠するんですか？」

岩の上で吹き出す。何百年も転生を繰り返した女性が。

飛び降りてきて、その健康的な肢体に、僕は夢を見ているんじゃないかって思う。目の前に立って、僕を見上げた。背の低い僕が見下ろせるんだから、アシリアは本当に小さい。

「じらしたほうが、いいみたい」めずらしく、そう言って、いたずらっぽく笑った。「答えは、別の人が教えてくれるでしょう。そのときまで、おあずけです。妊娠するかどうかも」

「それはうそです」

「ええ。ばれてしまいました」アシリアはリップクリームを塗り始めたばかりの少女のように微笑んだ。僕もつられて笑顔になる。

そう、大事な人だから。

「でも僕は、自分がなんなのか、それほど興味はないかも」

「そうかもしれないね。別にもっと、大切なことがあるなら、それは瑣末なこと。でもそうじゃない人はたくさんいると言うことも、覚えておいてください」

「はい。そうします」

「わたくし、ルーンさんに会えて、本当によかった」幸せそうな表情。幸せなのだろうと、僕にでもわかった。

なぜ、幸せなのだろう？ それは僕が与えたもの？ 僕の中にあるどの成分が、どう変化して、他人の幸せに変わっていくのだろう。

すこし、きょとんとしていたかもしれない。アシリアは話題を変えた。あまり困らせては、と言う気遣い。

「このまま、ずっとここで暮らしませんか？ 思ったより、楽しいかもしれませんよ」

からかう調子を含んだ声だったから、僕も笑って答える。

「いえ、僕はタケミカツチと共に在ります。それがすべてですから、でも戦争が終わって、なにもかもに調和が取れて、タケミカツチが要らなくなってしまうたら？」

そんな未来のことまで、考えは及ばない。僕はただ、戦うのだ。軍人なのだから。

そんなことを思ったとき、僕たちを呼びに、クラが現れた。

それは、ライア司令から入った通信を、知らせるものだった。

周辺の空気が、ざわつきはじめているようだった。

クラに連れられてアシリアは執務室に消え、僕は近くの部屋で待つように言われた。応接室なのか、他の部屋よりすこしだけ豪華だ。でも革張りのソファはなんだか他人行儀で居心地が悪い。陰のような女の人が気付かないうちに紅茶を持ってきてくれていて、僕はそれを飲みながら時間をつぶした。あいかわらず茶葉のことはさっぱりだけど、すこし歩いた後だったからおおいしかった。

一時間ほどで執務室へ呼ばれた。

アシリアは憂鬱そうだった。壁の一面が大きな開閉式ディスプレイになっていて、開きっぱなしだった。そこで先ほどまで、ライアと通信していたのだろう。開口一番、意外なことを言った。

「ルーンさん。すぐに準備して、出発していただきます」

「はい。どこへ？」なにがあつたのだろう。

「地上の教団施設です。とにかくいまは、身を隠せる場所へ。まもなく――」アシリアは首を小さく振った。なにを払おうとしているのか。「教団母船は砲撃を受けます。それまでに、エニアリスを連れて脱出してください」

それが苦渋の選択だったことは容易に想像できる、そんな表情だった。

ライアとの通信でどんな会話があつたか、アシリアの表情から逆算してみた。そう多くないパターンが予測された。黙ったアシリアに代わってクラが説明をはじめ、それを裏付けてくれた。

「現在、旧第三師団の叛乱軍は、第二師団と交戦状態にある。叛乱軍は第三師団の艦艇のおよそ七割を獲得。その中には旗艦アメノオハバリ、戦艦十隻、重巡洋艦二十五隻、ドッグ艦二隻が含まれ、つ

まり、主力のほとんどは敵の手に落ちたと言うことだ。難を逃れた残りの艦は第二師団に統合されているが、そのほとんどは駆逐艦、フリゲート艦で、戦力としては、現状微々たるものとなっている」
駆逐艦のミサイル戦法が封印された矢先だ。ミサイルのない駆逐艦など、豆鉄砲で武装した鳩だろう。「新編成の第二師団は指揮系統も混乱し、戦局は芳しくない、と言う話だ」

「戦域は、だいぶ、ここからは離れているはずですが」あの位置からの砲撃が、ここへ届くわけがない。

「ああ。ライア中將はわざわざ、母船を攻撃するために戦艦を一隻派遣したらしい。よくはわからないが、超長距離砲撃が可能な艦だそうだ」

「なるほど。それなら、おそらくは、これでしょーね。——使っても？」アシリアがうなずいたのを確認して、机の上にあるコンピュータの端末を操作する。ネットワークを検索し、公開されているデータを表示させた。

「戦艦タケミナカタ。主砲の有効射程距離は二十万キロメートルです。大鑑巨砲主義者がでつちあげた化け物戦艦ですね」

どこをどうひねくりまわしても、軍艦には見えない船の映像が表示されている。戦艦タケミナカタ。一番近いのは、そう、電信柱を運ぶ途中のトラックだ。巨大な砲身は全長一キロもある。

「純粹水爆式徹甲榴弾と言うものを使用するそうだ。爆発半径千キロ。わずかでもそれに母船がかすめれば、跡形も残らないらしい」クラの口調だけは淡々としている。メニューを棒読みするウェイトレスが、ちょうどこんな感じだ。

「十二時間後に砲撃が開始されます」アシリアの口調は重い。「中將の要求は、それまでにエニアリスを引き渡すこと。わたくしたちは、なにを犠牲にしても、それだけはできません」

「どうしてですか？」教団にそんな責任があるとは到底思えない。むしろやっかいものを持ち込んだ僕ごと追い出せば済む話だろう。

「叛乱軍は、我が神、八十禍津日神を掌握しています。先日の第一

師団壊滅の折の爆発、ご存知ですか？ あれは、八十禍津日神が三次元にご降臨なされたときのもの。実に数百年ぶりの顕現です」アシアはうなずき、立ち上がった。「そうですね。時間はありませんが、すこし、ご説明しましょう」

「お願いします」どうやら、教団に関する事情がなにかありそうだ。アシアが端末を操作すると、ディスプレイには古文書が表示された。僕も見ることがある。古事記の一節が書かれた、古い資料だ。「八十禍津日神の生い立ちと、『カムナオビ』について。特にカムナオビは、連邦の最高機密に当たります。現状、世界を崩壊させるもつとも有効かつ簡易な手段だからです」

そう前置きしてから、話し始めた。

「イザナギが死んだ妻のイザナミを追って黄泉の国へ入り、それからほうほうの体で逃げ帰ってきました。これが有名な黄泉渡りの神話ですが、そののち、イザナギは身体についた黄泉の穢れを楔ぎします。その穢れから生まれたのが八十禍津日神。八はとてもたくさん、と言う意味の神聖数字で、禍津日は凶事・災厄の神霊を意味します。そしてその禍々しさがあまりのものであったためでしょう、それを直そうとする神も同時に生まれました。その名を『神直毘神』かなあびのかみと言います。このカムナオビが降臨した御神体を、連邦政府は掌握していました。黄泉と高天原の相対バランスが崩れている昨今、自分たちで管理した方がより安全にコントロールできると考えたのでしょう……」

口ぶりから、その考え方には否定的であることがわかる。たしか以前にも同じことを言っていたはずだ。軍艦に神下ろしをして、邪神と戦うのはおかしいと。

「禍、とはつまり『曲がる』のことで、『直』の反意語に当たります。あくまで人の視点からの意見ですが、生物が生まれて死ぬと言うサイクルを繰り返す世の中である以上、曲りすぎてもいけませんし、また、真っ直ぐになりすぎてもいけない。大切なのはバランスで、それはいままで保たれていました。もし神直毘神の力が弱まれ

ば、八十禍津日神の力が強まり、一種の暴走状態に陥ります。現在の状況は、ここまで進行しています」

なにが邪神を暴走させたのか。

アシリアは語った。

「カムナオビを管理していたのが、エニアリスだったのです。カンナオビは膨大な容量のデータと融合するような形で、エニアリスに神下ろしされていた。ライア中將はなんらかの手段でエニアリスに攻撃を仕掛け、それを察知した彼女は逃亡し、たぶん、ジークフリード艦長の手元へ渡ったでしょう。もしかすると、エニアリスの協力者だったのかもしれませんが」

まずそうだろう。そのボディとしてアーリイを用意していたくらいなのだ。周到に時間をかけて、手回ししていたに違いない。

しかし、そんな大変な事態になっていて、よく戦争を始めたものだ。三日も遅れたと最初は感じたけど、この話を聞いた後だと、三日しか遅らさなかったのか、と思う。きっとライアが開戦をこり押ししたのだろうけど。

「中將は我が祭神を地上へ降臨させ、世界の破壊を行うつもりです。もし地上に八十禍津日神が現れば、因果律は致命的なまでに負の方向へ傾くでしょう。生きとし生けるものは致死し、地上は黄泉へ堕ちます。そうなれば天照ですら手の施しようはありません」

「あの、質問が」黙っていようかと思っただけど、僕は手を挙げた。

「ライア司令はなんでそんなことを？ メリットが理解できません」

「おそらくは」アシリアは目を閉じる。「あの方はスサノオに憑かれています。それも、破壊神としてのスサノオに。きっと、お姉さんが恋しくなって、駄々をこねているのでしょう」

「はあ」意味のわかる回答じゃなかったけど、それ以上説明する気はないようなので、引き下がる。「だいたい、事情はわかりました。でも、脱出する案には賛成できません」

「なぜでしょう？」

「これを見てください」今度は僕が端末で宙域図を表示させた。「

ブラックホールへ到達するためのルートです。母船の位置からは、高速艇でも最短で二日。そして間違いなく、最短ルートをふさぐようにして、タケミナカタを配置するはずです。となれば、残されたルートだと、戦局が叛乱軍側に相当不利にならないかぎり、駆逐艦であればどの船でも追いつける計算になります。この母船に、連邦の駆逐艦と渡り合える火力と速度を持つ船は――」

「そんなものはない。母船の船はあくまで自衛を主眼に据えている。速度も航続能力もない。向こうからこちらに来てくれれば、撃退できるだけの火力はあるかもしれないが」クラが答えた。

宇宙にも道と言うものがある。

黄泉にはダーク・マターと呼ばれる暗黒物質が存在し、それはまさしく目に見えない。正確に表現すると、レーダーやセンサーに極度に反応しにくく、光も吸収するから、ぶつかってしまつまで気づかないのだ。また、空間の歪みや時空が沸騰している不安定な場所も多く、マイクロブラックホールやワームホールがランダムに生成されていたりもする。

つまり、安全の確保された道でないかぎり、まったくの五里霧中を崖におびえながらすすむようなものなのだ。

僕は結論付ける。

「ライア司令はその点も踏まえた上で、脅しをかけてきたんだと思います。僕たちに残された選択肢は、エニアリスを差し出すか、もしくは、それとともに破滅するか、どちらかでしょう」

「差し出すくらいならば、滅ぶのみ……。それでよろしいのですか？ ルーンさん」アシリアが僕を見上げる。上目遣いだった。なぜだか、僕は急にアシリアを抱きしめたくなくて、その衝動を抑えるのに必死にならなければいけなかった。

静かにうなづく。

それから、首を振った。

「現時点で、選択肢はそれだけしかありません。でも、選べる方法って、状況の変化に応じて、増えたり減ったりするものだと思います

す」

「ええ……一般的には」

「すこし、遅いとは思ってるんですが。ジーク艦長が無能じゃないことは、僕も知ってますし。あの人の選択肢を想像すると、こうするしかないって、決まりみたいなものなんですよ」

アシリアが顔に疑問符を浮かべた。

ちょうどそのタイミングで、部屋の通信機が鳴り、クラが取った内線のようなだった。

「アシリア様」鉄面皮にしては、目を丸くしている。いいタイミングだ。思わず口元が緩んでしまった。「哨戒艇が、着艦要請信号を発する、連邦軍の艦艇を発見したと」

「あら……」聡明なアシリアは、それですべてを悟ったようだ。もしかしたら、僕たちに付け加えられた、新たな選択肢も。「それは、ぜひお寄りいただかなくては。そうでしょう？ ルーンさん」

「ええ」

僕らは顔を見合わせ、微笑みあった。

2

三十分後、母船の収容ゲートには、青い駆逐艦が、羽を畳んで鎮座していた。

高速駆逐艦タケミカツチ。

僕に乗る、僕が帰る場所。

数日離れただけなのに、なんだかなつかしかった。もしかしたら、もう会えないのかも、なんて不吉なことを、心のどこかが考えていたのだろうか。艦を離れることなんて、地上だとしょっちゅうなのに。なつかしい、よりは、うれしい、に近い。

「やあやあ、ルーン・マクベス准尉。おひさしぶりです」多少嫌味つたらしく、ジーク艦長がタラップを降りてくる。たいして久々でもないくせに。続いてサクヤ、キリエ。整備士や作業員の面々。み

んな、顔が翳って見える。べつたりとした疲労を背負っていた。ここまでやってくるのが、並大抵のことじゃなかったって無言の主張。「おひさしぶりです、艦長」敬礼する。ジョークには付き合ってやらないと。

「まったく、オペレーター無しに航行するのがこれほど困難とは思いませんでした。おかげで母船を発見するのにえらく手間取ってしまつて。どうです？ 間に合いましたか？」

「はい。まあ、及第点といったところです」

「おや、手厳しい。こっちはほんと、手が足りなくて足りなくて……。ん、まあ、そんなことはいいのです。過ぎたことは。状況をお教え願えませんか？ なにせ隠密行動ですからね。通信も極力控えただけ、情報が少ない」

「それでは、こちらへ」アシリアが優雅に誘導する。それから僕へ向けて、「しばらくしたら、お呼びいたします」

「ありがとうございます」僕への気遣いだろ。タケミカツチを眺めていたって、顔に書いてあったのかも。

アシリアに続いてジークはゲートを去り、影のようにサクヤが従って出て行った。あの人も、苦勞が多そう。ジークの見えない手足になることなんて、僕じゃ想像もできないくらい陰湿な作業。悪い人じゃないけど。

「やあーっと、ひと息つけるわあ」

万感の思いを込めるようにして伸びをしたのは、キリエだ。新しくつけた左腕は、やっぱりいまも白っぽかった。でも、革張りのソファ程度のよそよそしさだから、親しい人以外には違和感がないだろう。

「僕が出たあと、どうなりました？」

「珍しく艦長が荒れててね。珍しくって言うか、冷静さを欠いたあの人を見たのは初めてだったんだけど。それで丸一日くらい無駄にして、そこからもう、勘弁してよって感じ。第二師団への統合命令を無視して、この教団母船を探すってんだから。叛乱軍にも、連

邦軍にも、もちろん邪神にも見つかるわけにはいかないから、ありえないくらいにエネルギーの使用を制限して、しかも半分以下の人間で艦を運用するのよ。ブリッジなんて三人しかないし。ほんと、神経がすり減った。二度とごめん」

「じゃあ、タケミカツチは現在、行方不明ってわけだ……」これなら自信を持つて選択肢とすることができると期待通りだった。

「ま、そうね。そつちは？」キリエは聞いたが、そんなに興味はなさそうだった。仕事の大半は終わったと思っているのだろう。本当はここからが仕事の始まりなのに。ちょっと可哀そうだったけど、現状をかいつまんで説明した。母船が狙われていること。タイムリミットがあと十一時間くらい。エニアリスが眠ったままであること……。

うんざりするのかと思ったけど、案外キリエは素直に聞いていた。興味なさそうだったのは、母船に入ってからがさらにたいへんなんだって、あらかじめわかっていたからのようだ。それがわかって、ちょっと安心した。

思ったよりも早く呼ばれて、僕とキリエはアシリアの待つ部屋へ向かった。

今度は執務室じゃなく、もう少し人数の入れる会議用の部屋だった。テーブルの一面がディスプレイになっている。これで部屋の照明を落とせば、映画に出てくるような秘密結社の一室になるだろう。「結論から申し上げます」僕たちが入ってきたのを見計らったか、ジークが自信たつぷりに言い放った。「エニアリスを渡す必要はない。なぜなら、母船が破壊されるおそれはないからです。タケミカツチが、それを食い止めます」

そう言えば、サクヤの姿が部屋にない。どこにいったのだろう？ 集まっているのは、僕らタケミカツチのクルーと、教団側からはアシリア、クラ、それから見たことのない老人が数人。教団のお偉いさんだろう。

「具体的な方法は？」その老人の中のだれかが口を開いた。

「簡単な話です。実に簡潔。敵の砲弾と正面からぶつかって、破壊すればよいわけです」ジークはわざと、人を食ったように話している。うつぷんでも溜まっているのだろうか。

「艦長。すこし寝たほうがいいんじゃない？」老人たちが騒ぐよりも早く、キリエが呆れて言った。「この二日、寝てないでしょ」

「馬鹿な。ラシャ少尉、睡眠不足にはちがいありませんが、私は正常です。信用できないなら、彼に聞いてみましょう。マクベス准尉、私の作戦は実現可能ですか？」

「はい」僕はうなずく。「十分に可能です」

キリエがジークに向けていた顔をこっちに振った。そんな目で見るのはやめてほしい。はやいところ補足したほうがよさそうだ。

「説明します。タケミカツチのメインエンジンと、攻性バリアを使用します。メインエンジン『立氷^{たちひ}』の最大出力によって敵砲弾の速度を上回り、さらに剣状に展開した攻性バリア『神度^{かむど}』で破壊します。砲撃に使用が予測される純粹式水爆徹甲榴弾ですが、水爆の起動は時限式ですので、起爆前の破壊で爆発が起きる可能性はありません」

「ちょ、ちょっと待って——」キリエが片手でこめかみを揉んだ。

「たちひ、とか、かむど、とか、はじめて聞いた名前だけど。メインエンジン？」

「はい。タケミカツチは、いままでサブエンジンのみで稼動していました」

「……………」キリエは黙り込んだ。知らなかったのも無理はない。艦長、副艦長、それから艦の制御を司る僕と、整備士の数名しか知らないのだ。

「なぜ、タケミカツチのみが、高速駆逐艦と言う独立カテゴリに分類されているのか。これが答えです」ジークが後ろ手に組んで、面々を見回すように歩んだ。「我がタケミカツチは、バリアを剣として展開し、高速で敵を切り裂く。主砲やミサイルなどただの飾り。この体当り戦法を主眼に置いて開発された、特別な軍艦なのです」

部屋の中は静まり返った。

突拍子もない話に驚いたのか、呆れたのか。

気をよくしたように、ジークは続けた。

「敵砲弾を破壊後、そのままタケミナカタを攻撃します。第二射までは、弾丸装填、及び砲身冷却に十分ほど時間がかかる。十分あれば上等です」

「あの馬鹿でかい戦艦を落とすのですか？ 駆逐艦一隻で？」先ほど質問した老人が、笑いながら言った。ジークはメガネを押し上げる。調子が上がってきたようだ。

「ええ。もちろんです。マクベス准尉の言葉を借りるなら、十分に可能だ」

「ジークフリード艦長。貴殿は策略家として名高い。あなたがおっしゃるならそのとおりなのでしょう。ですが我々には根拠が必要なのです。逃げずに戦う価値があると言う根拠が」

「それはタケミカヅチのスペック的なものを見ていただければ充分に足ります。本当は機密なのですが、この際だ。公開しましょう。ただ、それらを眺めて、結論を出していただくまでの時間、その時間がもはや存在しないと言うことは含んでいただきたい」

ジークはそこでアシリアの方を見た。なんていいタイミング。この卑怯なくらいの流れを作り出す話術は、見習いたい部分だ。もっとも、僕は無口な方だし、詭弁家でもないから、ああいう風にはなれないけれど。なりたいわけでもない。むしろ駐車禁止のプレートばかりにお断りだ。

アシリアはうなずき、そっと立ち上がった。

「長老会のみなさん」老人たちの集団は、長老会と言うらしい。「ジークフリード艦長のお言葉を信じましょう。わたくしたちには、我が祭神を滅びの神として叛乱軍に差し出すか、否か、その選択しかありません。ならばおのずから取る道は決まっています。そのための手段を提供していただける、それだけで充分だと思うのです」

結局、アシリアの鶴の一声で決まった。

老人たちはひれ伏すみたいにおじぎして、決定に従う意思を示した。

「それでは詳しい作戦を話し合いましょう。タケミカヅチにも、多少の補給物資をいただきたい」ジークがメガネを押し上げながらテーブルに向かい、備え付けの端末で宙域図を表示させ始めた。テンションが高いようだ。寝てないからだろうか。

そのとき、入り口の扉が開いた。

制服をびっちり着こなしたサクヤが立っていた。この人はいつだって隙がない。泥をかぶったみたいに疲れていたって、磨き上げた鏡のようにきれいだった。服も、姿勢も。

「報告します」改まった口調。「エニアリスが目覚めました」

一瞬、室内はシンと静まり返った。

母船の技術者が何日かけても反応がなかったのだ。僕も立ち会ったことがあるけど、自閉しているとしかわからなかった。

「おつかれさまです」ジークには予想できていたようだ。もしかして、サクヤに何か作業をさせていたのか。「それでは、そちらを先にしましょう。みなさん——」

「いえ」サクヤがさえぎった。めずらしいことだ。それから僕へ目を向ける。じっと見つめられて、僕はすこし緊張した。「まず、マクベス准尉に会いたいそうです」

「……そうですか。ええ、わかりました。それが順当でしょう」肩をすくめるようにしてジークは応え、僕へ指示する。「マクベス准尉。お行きなさい。始祖AIに失礼がないように」

「はい」僕は敬礼する。なんだか、そんな雰囲気だったからだ。

3

やっぱり、すこし、緊張していた。

僕だってプログラマーの端くれで、その視点から見ると始祖AIなんて存在は本当に伝説のような存在、たとえばライア司令に会っ

たときだつて僕はぜんぜん緊張していなかったけど、いまは心拍数が上がって手に汗をかくくらい。どっちとも雲の上には違いないけれど、それなら僕は軍人としてよりプログラマーの自分にアイデンティティを持っているのか、と自己確認できる。軍人なら普通、ライアと会うときに緊張するものだろう。

でも……。

そんなことよりも、アーリイの姿をした存在と相對することに、緊張しているのかもしれない。

もしかして、急に哀しくなつて混乱してしまうかも。そんな危惧が僕の心拍数を早めているようにも思う。普通でいられるだろうか？ でも、僕にとって普通ってなんだろう。心がフラットであること。思考が乱れず、一貫していること。心臓の脈拍が一定数であること。どれも今現在に於いて当てはまらない。僕は普通じゃない。普通じゃないまま、会いに行つていいのだろうか。

斜め前方を歩くサクヤに目を向ける。

さっきも思つたけど、この人は本当に揺るぎない。乱れたところや、ちよつとでもぶれたところを見たことがない。ヒールの立てる音のリズムは等間隔だし、まっすぐに下ろした栗色の髪はそよ風にはためくカーテンのようだ。しかし、なにかも完璧なのだけど、一見してそうじゃないところがミソなのだ。そう、ほら、文化財のお城の石垣だつて、どんなに叩いても蹴つてもぐらりとしなないけど、それを構成している石は不揃いにばらばらで、ぱつと見は不安定に感じる。それと同じ。だから周りと自然に溶け込んでいるし、関係も円滑に行く。だけど実は、精緻なパズルのように組み合わせさつて動かないのだ。

そんな栓のないことに脳を使っているうちに、サクヤが足を止めた。僕が来たことのない場所だ。客間、と言うか、ゲストルームと言った方がいいか、そんな感じの部屋。ノックをして、やはり礼儀正しい声で告げる。

「マクベス准尉をお連れしました」

「入れ」

まだ聞き慣れない、でも聞いたことのあるアーリーの声。心臓が冷蔵庫に入ったみたいに冷たい。でもバクバクと速い。サクヤが僕を見てうなずいた。

「失礼します」

声は普通に出た。だいじょうぶ。ノブを回し室内へ入る。部屋の窓は大きくて、十分な光が取り込まれていた。その窓際にテーブル。そして人影。

アーリー。

椅子に腰掛け、手にはカップを持ち、生きて、動いている。

腹の底に何か熱いものが膨れ上がっていることに気が付いた。これはなんだ？ はじめての経験だった。どうやらそいつは、そのまま胃を突きあがって、食道を通り抜け、喉から口の外へ飛び出したみたいだった。

たぶん、叫び声になるだろう。だから僕はがまんした。飲み込むみたいに、ぐっと拳を握って。

「私はコーヒーが好きだ」おかげで、次にエニアリスが口を開いたころには、もう衝動は収まって、多少落ち着いて話を聞くことができた。「人型に入ると、目覚めには必ず飲むことにしている。している、と言うより、そう欲求される。この作業で物質世界が認識されていく。コーヒーは数十年ぶりだ。もう飲むこともないと思っていた。その点だけは、あの男に感謝するでしょう」

エニアリスはカップを傾けながら、独白のように続けている。僕の方へは、まだ視線すら飛ばしていない。ようやく、相手を観察する余力が持てた。長袖の軍服をきちんと身に付けている。スカートではなくパンツタイプのアンダーで、これは昔、集合写真を撮るときにアーリーが着ているのを見たことがあった。艦内で制服姿だったところを見たことがなかったから、ここまで持ち込んでいたことに驚きだ。金髪は三つ編みにまとめて、簡素に背中から垂れていた。これはもう、アーリーじゃない。

やっと、実感が沸いた。頭ではわかってはいたけど、わかっていただけだったんだと気が付いた。同時にさっきの熱い塊は、腹の底に落ちて行って、薬で散らしたみたいに霧散していった。虚しく、黒々と。僕が一番深いあたりに、広がって散った。

「自己紹介しよう。私はエニアリス。階級は特務大尉、二階級上の中佐扱いだ。名前を呼ぶときはアリスとしてくれ。いつも最初に言うのだが、私はエニアリスと言う名前が好きではない。始祖機械エンジニアックを女性形にもじっただけのものだからだ。私が生まれた当時は色々と実験段階で、もの扱いだったことに不満はないのだが、あの真空管の化け物の発展形に並べられるのはどうにもがまんならない。……ああ、私は真空管が嫌いだね。あれは脆すぎる」

どうも、エニアリス——アリスは饒舌な性格のようだった。僕は言葉が切れるのを待って、敬礼した。

「ルーン・マクベス准尉です」

「マクベス准尉。君はこのボディの持ち主と特に親しい。だからはじめに会っておこうと思った。君はタケミカツチにとって重要な人材だ。同じ姿をした他人がうるついで、なにか動揺があつてはならないと思つてね」

「お心遣い、感謝します」

「その様子だと、もう理解したかね？ 私がアーリイではなく、エニアリスだと」

「はい」

「よろしい」アリスはコーヒーマウ一口含むと、立ち上がった。砂糖とミルクは入っているだろうか、とすこし気になった。サクヤの方へ顔を向けて、「それでは他の者をここへ。多くてもいけないな、艦長、巫女、あとは必要と思うもの数名のみ連れてくるように」了解いたしました」サクヤは敬礼してドアを抜けて行った。

部屋には僕とアリスだけが残った。お互い立ったままだ。サクヤの足音が通路の向こうへ消えたころ、アリスは僕をじっと見て言った。

「マクベス准尉。こちらへ」部屋には腰掛ける場所がテーブルの椅子の数脚しかない。そこへ座れと言うのだろう。だが違った。アリスは僕の目を見たまま言った。「私の目の前に立て」

指示どおり目前に立つ。アリスは腕を後ろに組んだまま、直立している。僕と背丈は同じくらいだ。正面から見つめあうかっこうになる。そう言えば、アーリイとも、顔を付き合わせて見つめあったことはない。まあ、恋人でもない限り、そう言うことはあまりないだろう。でも、目が違うと思った。目つきが。丸くなくて、四角いと言つか。同じ部品なのに。やっぱり、違うのだ。

「もうすこし前へ」言われて、前に出る。距離は三十センチを切った。「もう一歩進め」

そうしたら、本当に鼻がくっつきそうなほどになった。拳ひとつ分くらいしか隙間がない。そのまま、相手の目を見る。僕はどんな顔をしているだろう。それを瞳の表面から見つけようとした。でも残念ながら僕は窓から逆光で、アリスならそれをできただろう、と気づいただけに終わった。

そのとき、突然腕が回されて、僕は抱き寄せられていた。頭の後ろを押さえつけられて、アリスの首筋に鼻が埋まる。もう片方の手は背中にあつた。

僕はじつとしていた。

かすれるような声が言った。

「ずっと、こうしてみたかったって、アーリイが」

はっと、息を吞む。僕の喉が。

「私はエニアリスだが、アーリイのすべてを含んでいる。私たちA Iやアンドロイドは死んで魂が落ちてても、記憶がハードに残ってしまふんだ。遺伝情報しか残さない人間は、きれいな死に方でうらやましいよ。だが、そのおかげで、死んでしまったものの遺志を知ることが出来る。なんのなくさめにもならないけど、こうやって、できなかつたことを果たしてあげることだって……」

そう言って、アリスは僕を抱く腕に力を込めた。

この、ふんわりとした匂いは、まぎれもなくアーリーのものだ。そう認識したとたん、僕の心はめっちゃめっちゃに乱れた。

アーリーの過去の姿が、いくつもいくつも明滅した。思考はかき回され、ノイズのスープみたいになった。わけのわからない、体験したことのない感情が渦巻いた。どうしたらいいかわからずに、僕はしがみつきたいにして、目の前の身体に手を回すしかできなかった。

心の奥底で、なにかが蠢くみたいに身じろぎしていた。

ひよっとしたら、僕は泣きたかったんじゃないだろうか。

僕にも……。

僕にだって、そう思うことがあっても、いいじゃないか。

だけど涙はでない。一滴も。

なんて、無駄な生物。

あくびを我慢したり、足の小指をぶついたりしたら、涙のひとつも出ると言うのに。

必要なときに必要なものが存在しないなんて。

本当にほしいのに。

嫌になる。

まったく、僕は……。

でも。

頭と背中の手が、やさしく上下して。

僕は心地よさと安堵を思い出し。

この暴力的な嵐の中、徐々に、停泊すべき港を見つけていくことができた。

それは、母親の手に導かれる、稚児のような。

いや……それとも、もっと別の。

愛情とか……。

「さ、過去の清算は終わりだ」

僕が自分を取り戻したころ、ポンと背を叩いて、アリスは離脱した。

僕も離れる。シールの裏紙みたいにうまくいった。あれはなかなか、よくできているものだ。離れるまでは意地でもくつついているくせに、一度はがすともうくつつかない。
僕もそう在れると、はつきり理解した。

4

しばらく経ってドアをぐり抜けてきたのは、ジークとアシリア、それからキリエ、案内人のサクヤ。それだけかと思ったら、背の高い幽霊みたいにクラもいた。目立つのに気配がないって、すごい特技だと思う。

エニアリスは僕のとくと同じように、饒舌な自己紹介をした。ジークとはどうも既知の間柄のようだった。アシリアが優雅に名乗り、キリエが若干緊張しながら敬礼し終わって、すべてを聞き終わるとアリスは言った。

「ジークフリード・ハヤカワ少佐。私の前に立て」

僕のとくと同じだ。なにをするのだろ。まさか抱きしめるってことは……。

と思いきや、いきなりアリスはジークを殴った。平手だった。

派手な音がして、ジークはたたらを踏む。思わず肩をすくめてしまっただった。

僕はびっくりして、殴った方と殴られた方を交互に見回した。ジークの頬は赤くなっていて、メガネがずれていた。表情はよくわからない。

アリスは睥睨するみたいに睨みつけて、言い放った。

「お前のやり口は気に食わない。いまのはその分の因果応報だ。受け取れ」

「はい。ありがとうございます」すばやくメガネを直し、ジークは直立した。やっぱり、表情はよくわからない。

「非常に合理的で効率的な手段だ。事態はすこし変動したようだが、

最大に効果的なものであると評価する。私の救出も含め、よくやつてくれた」アリスは睨んだまま、褒めた。

「はい。ありがとうございます」

僕はふたりのやり取りがよくわからなくてアシアを見た。アシアはジークの赤く腫れた頬を気にしているようだった。そのとなりのキリエが変な顔をしていたから、これはわからないのが当たり前だろう、たぶん。

微妙な沈黙が一時流れ、それから気持ち切り替えたようにアリスは腕を後ろ手に回すと、窓の方へ数歩歩いた。足音は特にない。ヒールの靴ではないからだ。

「私もライア中将の叛意には憂慮する。特に、私へのウイルス攻撃による『カムナオビ』のバランス崩壊は、あつてはならない最悪の行為だ。これを許すを良しとせず、さらに地上への八十禍津日神の降臨を阻止すべし、現段階での私の立場はこのようなものだ。私にできることがあるならば惜しみなく協力しよう。ただし——」そこでアリスは振り返り、三つ編みが飛ぶように跳ねた。「私が協力するのは、ルーン・マクベス准尉の行動のみとする。マクベス准尉。君が進むべき道、取るべき方法、選ぶべき未来、私はそれを実現するため、一助となるう」

鳶色の瞳が射抜くように僕を見据えている。輝いた、清々しい、窓の向こうからの光よりも鮮やかな。

僕が？

申し訳ないけれど、僕には疑問だけしか浮かばなかった。

いったい、僕が何の助力を必要として、何をすると云うのだろう。

僕はただ、船に、タケミカヅチに乗るだけ。

そのためにここにいただけなのだ。

「……仕方ありませんねえ、准尉」苦笑気味に、ジークが進み出た。「少々屈辱ですが、認めましょう。私は君に敗北した。私が計算と予測を幾重にも重ね、何年もの時間をかけて準備して来たことは、君が気づかないうちに築き上げてきたあまたのものに敗北したので

す。しかし敗れたとは言え、私も積み重ねてきたことをふいにするつもりはないし、また、ライア司令を止めねばならないと言う使命も忘れるつもりはありません。私もまた、君に協力しましょう。誓ってもいい。私は全力を持って君を支援する。マクベス准尉」

ひよっとしたら、僕は目を白黒させていたかもしれない。

ついさっきまで、みんなの視線はアリスへ向けられていたのに、いまやそのすべては僕のところにあった。アリスは見据え、ジークは苦笑い。アシリアは穏やかで、クラは無表情。キリエだけがちょっと僕に近い。きよんとした顔。

「まだ、わからないかしら」そしてサクヤが口を開いた。「ルーン君。あなたは前に、自分で言ったよね。みんなの中心にいるって」僕はうなずいた。覚えはあった。どうしてそんなことを言ったのか、もう思い出せないけど。

サクヤは続ける。

唄うように。

眠るように。

「それはきつと、今日の日の予言。見て、ここにいる人たちを。アリス大尉も、ジーク艦長も、あなたの力となってくれる。教団の巫女様とも、あなたはお友達。ライア司令を止めるための力は、すべて、あなたの手の中にある……」

なるほど……そうか。

いまの僕には力がある、と言うこと。

ライア司令と戦うことのできる力が。

だけど。

なぜ、僕が中心にいるのか。

どうしてもわからない。

僕が僕であること。

そんな簡単なことすらわからない、この僕が。
どうして？

僕には記憶がない。

僕には過去がない。

僕が僕である意義なんて、ないものと思っていた。

他の誰か他人が僕だったとしても、かまわないんだって。おどろかないって。

でも……。

集まった視線を、ひとつひとつ、見返していく。

たしかにいま、僕は、中心にいる。

こんなに、確固たる存在感で、この場に立っているのに。

僕が存在しないなんてこと、あるのだろうか？

それでも僕は、何も感じない。

何も感じる事ができない。

ただとただひとつだけ、わかることがある。

僕が存在するとすれば、そう。

すべてはたったひとつのこと。

「僕は、タケミカヅチと共に在ります。それだけです」

それだけ。

それだけが望み。

それが果されるから、軍にいるし。

それが果されるよう、さまざまな人間関係を、保っている。

僕はただ、そのためにだけにいる。

溜まっているだけの力。

ここにあるだけの……、岩に刺さった剣も同じ。

「ついに、このときが来ましたね」アシリアが微笑を浮かべ、ゆったりと歩み出た。なぜだろう、僕はその顔を見たとき、もう予感していたように思う。「わたくしの頼みを、聞いていただけますか？」

「はい」僕は応えた。揺ぎ無い。僕もまた、こんなにも揺るがないものだったのだ。それはなぜだ？ みんなの視線が僕を支えているから？ 使命が上から引っ張っているから？ それとも——僕は……。

アシリアは足元に跪く。神に仕える巫女が、神以外のものに。そ

して言った。

「どうか、わたくしたちをお救いください。地球を守ってください。ルーンさん」

その言葉が、つかみ取る大きな手となり――。

僕は応えた。

「はい。守ります。僕のすべてを賭けて」

いま、剣は取られた。

僕は抜き放たれたのだ。

僕が誰かなんて、いままで気にしたことはなかった。
でもそろそろ、それを考える時期にきているのかもしれない。
考えたところでどうなるってわけでもないけど。
ルーン・マクベスと言う名前のタグが、どんな意味を持っている
のか。

すこしだけ興味が出てきたってのが本当のところ。
だけど……。

こうやって、金色の世界に漂っていると。

その意味なんて薄れてしまっただけ。

かぎりなくゼロになる。

僕はタケミカヅチのひとつ。

オペレーターと言う部品。

それ以外になにも必要じゃないって気持ちになってくる。

いま、タケミカヅチは教団母船を離れ、タケミナカタの迎撃に向
かっている。

砲撃まであとすこし。

黄金の網はかがやきを増して脈動している。

戦いの予感に歓喜して。

アドレナリンを分泌するみたいに、白い光を駆け巡らせている。

僕もときどきしてきた。

やっと、ようやく。

すべてのリミットを外して、飛べるのだ。

手に取った剣を叩きつける相手が邪神じゃないのは本意だけど。

でも、僕たちの本当の目的は、その奥にいる八十禍津日神。

叛乱軍がいまも曳航していると言う巨大な邪神。

僕たちはタケミナカタを排除して母船の安全を確保したのち、第二師団と戦闘を続けている叛乱軍を奇襲する作戦を立てていた。

僕は詳細を知らないけれど、ジークとアリスが立てた作戦だ。それがベストなのだろうってのはわかる。でも、それからあとはどうするのか。疑問点が残るけど、連邦の最高頭脳に異論を唱える者は、僕を含めだれもいなかった。

タケミカヅチにはアシリアとクラも乗っている。

巫女が存在。

やはりこれが、作戦の要になっているらしい。

「マクベス准尉。すこし、休んだらどうだ」

呼びかけられて、僕は夢から醒めるみたいに浮上した。目を開けると、世界は重苦しくて、鈍重な色に満ちている。すこしそれで憂鬱になるのがいつものことだけど、でも、目を開けていないと、アーリーの姿をしたアリスを見ていられないって言うのも事実。

ブリッジには、僕とアリスしかないようだった。戦闘開始まで他の人員は休息を取っている。アリスは、クリーニング店から出てきたみたいに制服を着こなしていて、軍帽まで被っていた。髪は三つ編みのまま。もはや、アーリーの面影はまったくくないと言っている。

「三日もゆっくりさせてもらってますから。ちょっとくらい平気で」

「そうか」

強いたりはずせず、アリスは淡白に返すと、予備のコンソールに身体を預けた。半眼を閉じて、息を吸い込む。僕はゆっくり上下する肩を横目で眺めていた。アリスは斜めに身体を預けたまま、三つ編みの先っぽを、すこし指で弄んだようだ。そして言った。

「第二師団が瓦解した」

「……そうですか」はい、と言う印象しかない。ライア司令に勝てるとは思っていなかったけど、こんなに早く負けるとも思っていなかった。

「これで叛乱軍を遮る物はなくなっちゃった。残る第四師団は境界の敷設が主な任務だ。戦力としては期待できない。このまま、八十禍津日神がブラックホールへ到達すれば、世界は終わる」

「ええ」息を吐くみたいにしてうなずく。「止めない」と

「たくさんの人が、死んだのだからな」アリスは悼んでいるのか。半眼に閉じたのは、そのためだろうか？「いいやつも、悪いやつも、どっちでもないやつも、いろんな人が死んでいく。こうやってネットワークにアクセスし、さまざまな情報をリアルタイムで見ていると、まるで断末魔が身近に聞こえてくるようだ」

「はい」すこしだけ、その気持ちはわかる。墜ちていく艦の、生命反応をモニタリングする仕事なんて、嫌なものだ。侵入した邪神に殺されたり、減圧や酸素不足でゆっくり死んでいく様を見ているのは。

アリスは情報収集のため、こうやって話している間にも、さまざまな速度でネットを駆け巡り、ハッキングを繰り返しているはずだ。そこには、あまたの死があるのだろう。

「サクヤには、何か言われたか？」

「いえ、なにも？」突然そう振られて、ちょっと驚いた。瓦解の話どころか、いっしょにアリスの元へ向かって以来、話もしていないや、あのときだって黙ったままだったから、最後に会話したのはいつになるっけ……。

「そうか。いつまで……。いや、最後までか……」アリスは完全に目を閉じてしまった。しばらくそうして、ぱつと瞳を見開くと、僕をじっと見た。「ジークフリード・ハヤカワだが。なにか知っていることは？ 彼についてどの程度知っている？」

「公式のプロフィール以外は、あまり。メガネが伊達だってことくらい」なんの話をしているのか、よくわからなくなってきた。

「あの男もまた、災禍の生き残りだ」

「え、艦長が、ですか」

「ああ。十数年前に起きた災禍に巻き込まれ、たったひとりだけ生

還した。君と同じだよ」

「そうですか……」

「なにもかもが死滅し、死の国と化した場所で、三日後に発見された。そんな状況で人間が生き残れる可能性は、ゼロ。まったくのゼロだ。なのに、君と言い、他にも数件の事例がある。ライア・ハイゼンベルクも然り」

「ライア司令も……」

「言わずともわかるだろうが、君たちには共通する事項がいくつかある。感情はあるのだが、本質的なものが存在しない。言霊式に対する親和性が高く、それから、あらゆるものに無頓着でありながら、特定のものには異様に執着する」

「そうです。僕は何も感じません。ジーク艦長も、ライア司令も、きつと同じ」

「空の容器なのだよ」アリスはコンソールから背を離すと、後ろ手に組んでメイン・モニターの方へ眼を向けた。もちろん、そこには無味乾燥な黄泉の風景と、計器の情報しか映っていない。「私が語るのはここまでだ。これ以上は他の誰かが語るだろうし、このヒントから君自身が真実に気づいてもいい」

「アリス大尉は、僕がなんなのか知っているのですか？」

「そうだ」

「アシリアさんも知っているみたいでした。彼女は、巫女である彼女と同じ存在、と言うようなことを教えてくれました」

「同じではない。第一、君は男だ」

「ええ。妊娠しませんよね」

アリスはすこし笑った。ジョークのつもりではなかったのだ、ちよつと不本意だ。そう言えばアシリアも吹き出していたな、と思いだした。

「なにを教えられたか知らないが、君は、君一代で終わる」

「はい。わかっています」

「巫女がそう言ったのなら、そう……、君もまた、神に仕えるべき

存在。おそらくは、そんな意味だ」

神主や、禰宜のようなもののことを言っているのだろうか。正直、宗教には興味がないし、僕にとって大切なのはタケミカヅチに乗ることだ。それ以外のものに心を砕くなんて、想像も出来ない。

ならば僕は、建御雷神たけみかづちに仕えているのだろうか？

この……。

高速駆逐艦タケミカヅチには、建御雷神命がインストールされている。

雷神であり、剣の神霊である偉大な神が。

僕は、それに仕えているから、ここまで惹き込まれているのだろうか。

いつから？

どうやって？

はじめてタケミカヅチを見た時のことは、今でもよく覚えている。

一番古い記憶と言ってもいい。

その時僕は病院にいて、たぶん、そこは軍の病院だったのだけけど、気晴らしに看護師が軍艦を見せに連れて行ってくれたのだ。災禍から救出されて数週間は、ほとんど白痴の状態で、死体も同然だった。目は開いていても何も見ていなかったし、口は動いても言葉はでなかった。でも、押された車椅子がああ青い艦体に近づいたとき、僕の心には感動と喜びがマグマのように沸き上がったのだ。

その瞬間に僕は生まれたのかもしれない。

だとしたら僕は。

僕と言う存在は……。

「マクベス准尉」

跳躍した思考が、届かない向こう岸に指先を引っかけたと思った瞬間、鋭い声でアリスが呼んだ。なにかを警告する声音だった。

僕はすぐに理解して、計器をチェックする。レーダーに反応。

これは。

アラートのスイッチを入れるのと、マイクに向かって叫ぶのとは

ほぼ同時。

「第一級警報！ タケミカツチの乗組員はただちに戦闘配置へつけ！ 第一級警報！」

目障りな赤い照明が明滅し、耳障りな警報音が鳴り響く。こつこつという現実的な刺激は好きじゃないけど、寝ている連中を叩き起こすにはもってこいだろう。

リーダーは高速で飛来する物体を捉えていた。

まっすぐ、こちらへ——艦艇に出せる速度ではない物体。

戦艦タケミナカタの主砲が発射されたのだ。

2

「おやおや、まったく。時間より早いじゃないですか」上着に袖を通しながら、ジークがブリッジへ駆け込んだ。アラート発信から二分。すでにキリエモサクヤも席へ着いていて、ふたりよりも三十秒ほど遅かった。あからさまに寝起きだったから、疲労があつたのだろう。この人に同情的な気分になったのは初めてのことだ。

「タケミナカタの主砲弾と見られる物体が高速で接近中。本艦に到達まで三分。教団母船までは一時間です」

聞かれる前に状況を説明しておく。

ジークは艦長席へ腰かけると、引出しのロックを解除してなにか取り出した。カードキーだった。

「もつと、こつ、必殺技を出すときは、前振りをしてからにしたかったのですが。仕方ない。いきますよ、マクベス准尉」それを艦長席のコンソールへ差し込む。

「はい」

「マスターアーム・オープン。タケミカツチ、全武装使用許可！」

ピッ、と、僕のコンソールに緑色の簡素なマークが表示される。

小さいけれど、いままで表示されることのなかったマークだ。

「メインエンジン『立氷』始動！ 攻性バリア『神度』、展開準備

！

僕は潜り込む。深くダイブ。

金色の世界はまばゆかった。

さあ、いまこそ。

タケミカヅチの念願が果される時。

心臓の鼓動は、立氷の駆動。

伸ばした腕は、神度の刃先。

行こう。

喜びの、その先へ。

目を開ける。目を開けていても、僕にはすべてが見えていた。

「対象、増速！ 到達まで三十秒早まりました！」

「弾底のブースターを使いましたか。なるほどなるほど、狙いは母船じゃなく、私たちか。さすがライア司令……きちんと読んでくる」

ジークは感じ入ったようにうなずいて、「メインエンジン、状況は！」

「アイドリング完了です」

「さすが、早い。我が神もお喜びですか。では行きましょう。弾は我々とぶつかって爆発するように設定されている。前にも言いましたが、時限式です。遠隔起動ではない。ハッキングを恐れたからですが、逆手に取ります。突っ込みますよ。起爆時間より早くぶつた切るのです。——サクヤ、いいですか。操縦桿を保持することだけを考えて。まっすぐに進めばいい」

「了解です」操舵手のトウキがいらないから、代理でサクヤが座っている。半分開らい自動航行で飛べるならともかく、戦闘機動は代理には荷が重い。

「神度、展開！ タケミカヅチ、最大戦速！」

「神度バリア展開します！」僕の復唱。

「立氷最大出力！」サクヤの復唱。

攻性バリアの展開に合わせて、飛行ユニットの翼が畳まれる。

獲物に向かう水鳥のように身を細くしたタケミカヅチの周りを、

金色の輝きが包む。

それは前方を中心にして長く長く、まるで黄金の剣のように伸びていく。

後部のブースターが爆発のような光を発し、加速。

青白い燐粉をこぼしながら、黄泉を疾走する。

神の剣が飛んだ。

それはどんな光景だっただろう。

真の闇を切り裂いて、光の世界を生み出しながら、タケミカツチは走っただろうか。

神々は見ただろうか。

この、美しい艦を。最強の剣を。

爆発半径千キロの核砲弾だって？

おかしくて笑えてくる。

そんな豆鉄砲、鳩くらいしかびつくりしない。

でも教団の人たちは、鳩みたいにやさしかったから、きっと驚いたのだろうな。

僕は違う。

僕は峻烈な鷹だ。

激しい瞳で見抜き、鋭い爪でつかみ、容赦ない嘴で決り取る。

飛ぶんだ。

行こう。

あの不屈きなかぶつを食い千切りに。

ばらばらにしてやれ！

「減速！ 減速して！」

なにか喚き声が聞こえて、僕は我にかえった。タケミカツチから分離した、とも言えた。

横合いからの制御で、制動のブースターがブレーキ噴射され、タ

ケミカツチは速度を落とす。

「これは、ひどいな」

頭を振りながら、なぜか僕の隣でアリスが身を起こす。予備のコ

ンソールに座っていたはずだ。軍帽はなかった。

見回すと、ブリッジが嵐に見舞われたみたいになっていた。あらゆるものが散乱している。人間も。しっかりとベルトで固定していたサクヤだけが、青い顔で操縦桿を握りしめていた。

「いったあーい！　ちよつと、もう！」

喚いていたのはキリエだった。隅の方に集まった棚の合間から、長い足が飛び出している。逆さまになっているのだろうか。

「想像を超えていました。ここまでとは」ジークが入口のあたりから戻ってきた。メガネはあった。さすがだ。「マクベス准尉。砲弾は？」

「粉碎しました。おそらく木端微塵です」

「ぜんっぜん気付かなかったわ。いつ当たったの？」キリエが棚ごと持ちあがってきた。

「加速の十秒後です。わかりませんでしたか？」

「わかるわけじゃない、ほんと、これ、なんなの？　なにが起きたのか……」

なにが起きたもなにも、タケミカヅチは加速してまっすぐ進んだだけだ。その勢いがおそらく、はんぱないものだったため、重力制御しきれずにブリッジ内へGが溢れだしたってことだろう。どのくらいの速度が出ていたのか……計器をすべて振り切ってしまったから、計測できていない。次からはもっと目盛の高いものに交換すべきだ。

「ん、あれは……」アリスがメイン・モニターを望遠に切り替え、画像を表示させた。「タケミナカタか？　もう接近したのか……」

まったく、天照も考えることがわからないな」

「艦長」僕はジークを振り返る。七三分けをひと撫でしてからジークはうなずき、言った。

「攻撃開始！　ただし、無用に殺生する必要はありません。サクヤ、ちよつと、主砲を横切ってやりましょう」

「了解」

みるみるうちにタケミナカタの姿がアップになってくる。僕もこの戦艦の実物を見るのは初めてだった。異様で、巨大だ。ミサイルアレルギーの連中が作った艦だけど、ミサイルが邪神に使えない今、彼らの想像はまったく正しかったことになる。ミサイルの信頼性は低かったのだ。より単純な武器ほど効果的である、と言っ理論は真理だったわけだ。

ならばさらに単純な、この剣を持って。

その理論の正しさに裏打ちを加えよう。

副砲の射程に入り、はげしい弾幕が張られる。

立氷はびくともしない。

僕は揺るがない。

揺るぐはずもないのだ。

あれは獲物なのだから。

動けないウサギが、それを狙う狩猟者に向かって、キーキー威嚇しているのも同じ。

タケミカツチは横合いに回り込み、そこから前進。

切っ先を砲身へ。

加速。

切断。

制動、反転。

見えたのは、真つ二つになった巨大砲身が、その切断面から炎を吹き上げている様子。

紅い火花。

黄泉を彩る血しぶき。

美しい。

再び向ける。

金色の剣は、血を吸って輝きを増している。

ジークがタケミナカタへ通信した。

「賢明なる叛乱軍の諸君。次に両断されるのは諸君らの艦体だ。我々はたやすくそれをできる。ええ、通信販売の包丁が、トーストを

切るみたいだね」

降服は時間の問題だ。

早いか、遅いか。

決断力の差。

タケミナカタは、腕を握りつぶされ、屈伏する定めにある。

それは神代の昔に決まっていることなのだ。

さあ、はやく。

はやくしないと――。

「艦長」

現実の僕の口が、そう告げた。もう自動化された作業だ。

僕は見ている。目を開けていても、全部を。

だから、リーダーの向こうのことだってわかる。

「なんですか？」

「叛乱軍の本体がこちらに向かっています。旗艦アメノオハバリの主砲、反物質メーザーカノンの射程まで、あとすこし」

「……確かですか？」ジークは眉をしかめている。それから、アリスを見た。

「准尉を信じよう」アリスはうなずいた。

「了解しました。あれを食らえばさすがにタケミカツチでも危ないですからね」

対象に反物質をぶつけて対消滅させると言う兵器だ。三次元世界が物質で構成されている以上、理論的にすべての物を消滅させることができる。

サクヤが操縦桿を倒し、タケミカツチは離脱する。艦首を転回させる。

「X240方向。そう、そのままです。巡航してください」僕の指示によって、叛乱軍と向き合う格好に。

放置されたタケミナカタは水底に沈むナマズみたいだ。ぐったりと動かない。

そのとき、入口から足音が聞こえて、鈴を転がしたような声が言

った。

「すいません。よろしいでしょうか？」アシリアだった。もちろん、後ろにクラも控えている。

戦闘中のブリッジは立ち入り厳禁だけど、ジークは何も言わず、うなずいた。

「アシリアさん。だいじょうぶでしたか？」僕は急に心配になって聞いた。あの急激なGはブリッジだけの話ではないのだ。無事なのは見ればわかるのだけど、姿を見たとき心配になるって、ちよつと現金だったかもしれない。

「はい。クラがかばってくれましたから」アシリアは微笑む。その顔は僕の気持をすべて見通しているようで、やっぱり僕なんか人の心配をするのはまだ早いんだな、と思った。アシリアはそれからメイン・モニターを仰ぎ見て、「神の気配が近づいています。わたくしたちは、神の御許に向かっているのですね」

「巫女様、こちらへ」アリスが自分の座っていた予備のコンソールにアシリアを案内し、座らせた。それから傍らの影みたいな人物を見上げ、「あなたは――」

クラは首を振って遠慮した。たしかに、立ったままでも充分なのだろう。そのまま、アリスは副艦長席へ移った。

「広域レーダー、艦隊を捕えます」

僕は情報を表示させる。駆逐艦の策敵能力は低い。残念だがタケミカツチのレーダーもさして広い範囲が映るわけではなかった。すでにアメノオハバリの主砲の射程内だ。

半信半疑だったブリッジの面々は、表示された画面を見て息を呑んだ。

数多くの艦がこちらへ向かって前進している。

この駆逐艦一隻に向かって、一個師団が。

「わけわかんない。なんで？」

キリエの疑問ももつともだろう。それにアシリアが答えた。

「わたくしが目当てなのです」その言葉に、ブリッジ中の視線が集

まる。「こうなつたいま、わたくしが八十禍津日神を止めることのできる唯一の存在。ライア中將はわたくしを亡きものにするため、全力をぶつけるでしょう。みなさまにはご迷惑をおかけします」

「とんでもない。巫女様こそが要なのです。そのためにご同乗いただきました」ジークが大げさに腕を振って応える。わざとらしい。

僕は斜め上を見上げるようにして、聞いた。

「ジーク艦長。そろそろ作戦の詳細を」

「ええ、いいでしょういいでしょう」ジークは芝居がかってしゃべりはじめる。これはたぶん、まだ根に持っているのだ。「まず、第一に。アシリア様の保護は絶対です。各自、自らの命よりも、巫女様の安全を優先して行動するように。それを念頭に置いてください。そして本作戦ですが、艦内戦闘が想定されます。我々はアメノオハバリに侵入しなくてはならない」

「あーっと、正気ですか？」がまんならなかったのか、キリエが投げやりに手を挙げた。

「もちろんですとも。タケミカツチはアメノオハバリを攻撃しない。神度は自衛のために展開します。詳しくは時間がないので省きますが、アメノオハバリを一時無力化したのち、強行接舷チューブを打ち込んで内部に侵入。あれですね、海賊船とかが、映画なんかで使ってるものです。わくわくしますね」

「準備はしてあるんですか？」僕は訊ねた。

「ええ。珍しい。気が付きませんでしたか、マクベス准尉。左舷の接舷チューブをすでに改装してあります。先端がドリルになっていて、装甲をぶち抜いて通路を通しますよ。さて、アメノオハバリに侵入したのちは、八十禍津日神の本体を探します。現在、叛乱軍が曳航し、第一師団を壊滅させた巨大な身体は影のようなもので、それとは別に、御神体に神下ろしされた八十禍津日神を、連中は旗艦に積んでいる。あのでかいのがおとなしく艦隊についていている理由がそれです。御神体の在処は不明ですが、それはおそらく、巫女様の感覚でサーチできるでしょう。いいですか、この作戦の要綱

ですよ。我々の目的は御神体へ巫女様を接触させること。そのためにはなにを犠牲にしてもいい覚悟で臨むようにしてください」

ジークはブリッジを見わした。

すでにみんな、その雰囲気呑まれているようだ。

いつも思うけど、こうやってしゃべらせたら、ジークの右に出る人間はいない。

「それでは、現場に出る人員を発表します。まずキリエ・ラシャ少尉」

「はい」

「あなたの力にかかっていると断言してもいい。チームリーダーを任せます。みなを引っ張っていくように。それから——ルーン・マクベス准尉」

「え」

「君も行きなさい。ライア司令に太刀打ちできるのは、きっと君だけだ。これを持っていくように」

カードキーの入っていた引き出しから、ジークはなにを取り出し、僕に投げてよこした。折りたたみのナイフかと思ったけど、刃はない。刀の握りの部分だけのような、変なオブジェだった。

疑問符の乗った僕の顔に、多少いじわるい笑みを見せ、

「本当は私が使いたかったのですが。あれですよ、時が来ればわかります。必殺技はあとで覚醒した方がおもしろい」

こっちはちっともおもしろくない。一応、ポケットに収めておくことにした。

「最後に、アシリア様とクラティナさん。以上、四名ですが、なにそう構えることはありません。きつとうまういきます。……おっと？」

僕のコンソールが通信を知らせる音を発していた。僕は情報を表示させ、相手を読み取る。

「艦長、アメノオハバリから通信です。通常回線で開きます」

「やれやれ。一席ぶたないと気が済まないのは、革命家の性分だし」

ようかね。どうぞ」

メイン・モニターに映像通信を開く。

案の定、額の傷を誇示した、金髪のオールバックが映り込んだ。

ライア・ハイゼンベルク。

いまは連邦の制服ではなく、黒に赤の縁取りをした、諜報部っぽい服を着ている。

『タケミカヅチの乗組員諸君。まずは称えよう。タケミナカタの撃破、見事である。そして人的被害のなかったこと、私は心から安堵を覚え、また艦長の采配、他クルーの善意に、最大の謝辞を述べる』
いまのライアはいきいきと――強烈なまでの生命力を見せつけている。あの眼光。モニター越しですら、見据えられれば釘づけにされそうだ。

そついう、ディスプレイ。すべては見せかけ。

「ごたくはいいんですよ、叛乱軍司令。呑むか呑まれるか。やるかやられるか。ここから先は、そう言う戦いだ」ジークは人を食ったように唇を歪め、ライアを見返した。あの口調じゃ、どっちが悪者かわかりやしない。

『では前置きは省略しよう。レーダーを見たまえ、諸君。我が艦隊の戦艦をはじめとする攻撃艦のすべての武装が、君たちに向けられている。この包囲網をどのように突破し、君たちの狙いであるアメノオハバリへたどり着こうと言うのか』

「ふむ。ひよつとすると、司令。ご覧になってなかったのですか、先ほどの戦いを。いえ、あれは戦いですらなかった」そこでジークは僕を見て、にやっと笑った。なんだろう、僕も笑い返したくなる。悪役みたいな笑顔で。「狩りですよ。タケミカヅチに取って艦隊戦など、狩猟行動に過ぎない。あなたたちは獲物だ。羊と鹿が雁首を並べて整列しているだけだ。いまからそれを、証明しましょう。まず――ほら、始まる！」

ジークが叫んだ瞬間、何が起こったのか。

突然モニターが乱れ、通信が向こうから途切れた。

すばやく振りかえったジークが、再び言う。

「アリス大尉、いまだす」

うなずいたアリスが副艦長席で目を閉じた。ハッキングを開始する。直感で僕は悟った。

僕もタケミカツチを経由して、ちょっとだけアリスのネットワークに近づき、なにが起こっているのかを遠くで眺める。

なぜかアメノオハバリのシステムがダウンしていた。その隙をついてアリスはシステムへ介入し、復旧する速度よりも早く、それを制圧していく。

人間業では不可能な対応速度だ。

爆風が森林を薙ぎ払い、まっ更地にしていくようだった。そこにはトラップや巨大な岩が存在しているのだけれど、まるでおかまいなく、すべてを荒野と化していく。

システムの無力化まで十秒もかからなかった。

僕が同じことをするなら、数時間の作業だろうし、そもそも、復旧速度についていけないだろう。

「掌握した。作戦を第二段階へシフト」アリスはなんでもないことのように告げる。

「了解。さあ、見せてあげましょう、みなさん。立氷の速さをね！」ジークはメガネを押し上げて叫んだ。乗ってきている。

「立氷、出力最大！ 総員対ショック用意！」

サクヤも叫んで、操縦桿を握りしめた。

エンジンが急激にエネルギーを発生させ、それがタケミカツチに圧倒的な速力を与える。

一瞬のことだった。

おそらく武装の狙いをつけていたどの艦も、タケミカツチに照準を当て続けることはできなかったに違いない。

金色の軌跡を引いて、輝く剣がアメノオハバリの元へ飛びついたのは、まさに数秒の出来事だったからだ。

加速よりも減速のときのショックの方が大きかった。

いままで使ってきたサブエンジンが、今度はすべて制動のために使用されている。ブレーキングのときにかかるGで、ブリッジの中は再びめちゃめちゃになった。

僕はすぐにアシリアの方を振り向いた。クラの赤い髪がコンソールをかばっていた。

「だいじょうぶですか？」

「はい。なんとか」返ってきた返事に安心する。クラが僕を見てうなずき、離れた。

「……もう、最大出力はやめておきましょう」

艦長席に頭から突っ込んでいたジークがしかめ面で顔を上げた。

メガネは無事だろうか？ 割れてはいないようだ。

「接舷可能位置に調整します」サクヤが操縦桿を操作する。なかなか、微妙な位置取りがうまくいかないようだ。

「神度バリア、防衛展開。強行接舷チューブ発射用意」

「了解。神度防衛展開。チューブの用意できました」ジークの指示に復唱する。剣状に伸びていたバリアは、ハリネズミのように尖って艦を覆うように展開される。

「こちらも接舷位置に固定完了」

「よろしい。それでは、先ほどの四名。五分で準備してください。アリス大尉、システムダウンの時間は？」

「三十分が限度だ。それまではアメノオハバリのセキュリティと防衛機能が無力化されている。余裕を見て、出発時から二十分と考えてほしい」

「……行きはよいよい帰りは怖い、ってことね」

キリエが呟いて、立ち上がった。

たしかに……僕らが帰る頃には、システムが復旧しているだろう。そう言えば、戦争に出る前、アーリイに聞いたことがあったつけ。もう帰ってこれないかもしれないのにどうして戦うのか、と。

いまこそ、もう一度、じっくり自問してみるべきかも。

そんな暇は、ないのだけれど。

「強行接舷チューブ、発射！」
準備のためブリッジを離れる僕の代わりに、サクヤがそう報告する声が聞こえた。

3

「次を左です」

PDAの図面を見ながら、僕は誘導する。

アメノオハバリの中は照明が落ちて、非常灯のうす暗い明りだけが通路を照らしている。僕たち四人は、その下を足音を忍ばせて急いだ。

アシリアが感じ取る御神体の位置は、残念ながら侵入位置からは遠い艦の中心付近だった。旗艦ともなれば駆逐艦の十倍以上の大きさを誇り、内部を移動するだけで相当の時間がかかる。まして、人目を避けながらとなると、どうしても慎重にならざるを得ない。

先頭はキリエで、サブマシンガン等で武装している。真ん中に僕とアシリア。しんがりはクラ。クラは背筋を伸ばして、まるで横断歩道を渡っているみたいに歩いているけど、足音ひとつしない。タケミカツチの中でも物音ひとつ立てなかったから、もう、これは気配といっしょに足音も捨ててきたのだろう。キリエは身を低くしていつなるとき敵が現れてもいっしょに体勢を取りつつ進んでいる。こっちの方が、いかにも突入要員と言う感じで、それっぽい。

「キリエさん、ストップ」僕は図面を睨みながら、いろいろと予測している。「この先にホール状の空間があります。そこが各方面へのターミナルになっているみたいで、つまり、最短を選ぶならそこなんですけど、」

「迎撃しやすいのもそこ、か」キリエが視線を鋭くした。「何分経った？」

「五分です。目標地点まで、現在のペースで最短ルートを通った場合、あと十分。迂回すればさらに十分ほど加算されると思います」

「OK。三分でホールを突破しましょう。それなら余裕を持って間に合う。あたしが先行するから、三人はここで」

「いや、私が行く」意外な声にみんなが後ろを振り返った。クラが相変わらざる無表情で立っていた。「私なら敵が十名以内の場合、一分で片付く。保障する」

「でも……、いえ」キリエは一瞬逡巡したが、うなずいた。「うん、お願いします」

「アシリア様をお守りしてくれ」

クラはそう告げると、黒い風のように飛び出して行った。僕らもそのあとを追って、通路の出口付近まで進む。

「クラさん、だいじょうぶでしょうか？」戦っているところを僕は見たことがない。それにどうも、丸腰のようだ。

「ええ。クラに勝てる人間などいませんわ」アシリアは全幅の信頼を寄せて微笑んでいた。

ホールには予想通り戦闘スーツで武装した連中が配置されていた。武器は主に、取り回しのよいサブマシンガン。そのただ中へクラは突っ込んでいく。

「侵入者だっ！」

だれかひとりが叫んだ。その舌の根がかわかないうちに、敵のひとりがふっとんだ。

続いて、もうひとり。

なにが起きているのか……。

傍で見ている僕にも、よくわからない。赤いポニーテールが左に動いたと思ったら、次は右の端にいて、敵の銃口がそっちへ向くと、空中を飛ぶようにしてその背後へ移るのだ。

「なんだ、こいつ！」

はからずもその感想は、僕と同じものだった。

重力とベクトルと運動エネルギーの法則を無視しているとは思えない。

ばたばたと敵兵は殴り倒され、蹴り飛ばされ、投げ落とされて、

あつと言う間に最後のひとりになった。

「ひ、ひいっ！」

ひきつった声をあげて銃を向けるが、手が震えてまともに当たりそうにない。クラがゆっくりとそちらを向いて、視線を投げかけた。すると、ふつと糸が切れたみたいにして最後の男は地面にくず折れた。

「眼力で失神させたんですか……」

思わずつぶやく。この人が敵でなくてよかった。

結局、迎撃に配置されていた連中は、弾の一発も発射することなく、全員やられたのだ。

「制圧した。先を急ぐこと」

当の本人は息ひとつ乱している様子はない。

僕らはホールから目的の通路へ入った。狭い道だった。

なんだろう、すこしだけ、既視感がある。

うす暗い通路を、急ぎ立てられるようにしながら、僕は走ったことがある。

ああ——あるとき。

アーリイを連れてドッグ艦を脱出したときだ。

僕はアーリイを守ると言う使命を負っていた。

今も同じ。

みんなを救うって言う使命を負っている。

地球を守ってくださいって、アシアに頼まれた。

僕は守られてばかりで、甘えてばかりで、そんな、人に頼られる段階じゃないと思っていただけ。

いつの間にか、僕を中心にして物事が回っていた。

僕の役割は、いったいなんなのだろうか？

タケミカツチの望みを果たすこと。

それであればいい、と思った。

「ちっ、やっぱりか」

キリエが短く舌打ちした。目的地の手前。アメノオハバリの図面

を見るならば、セキュリティレベルのもっとも高い区画だ。

通路を曲がった先に、数名の敵が居た。キリエが顔を出して確認したから、もう相手にもこっちがばれているだろう。問題は狭さと、相手が簡易バリケードを築いていることだ。こちらの銃撃は届かず、突っ込もうにも、おそらくクラのスピードでも火線にさらされることになる。

「どうする？ 時間は？」キリエが苦い顔で振り向いた。あまりよい状況でないってことだ。

「あと三分です」

「正面から突破するしかないわね。敵は三人。頭まで防弾戦闘服で包んでる。武装度はかなり高いと見ていいわ。クラティナさん、悪いけど、おとりを頼める？」

「わかった」

「敵が照準を合わせようとしている間に、あたしが突撃するわ。一番威力の高い炸裂弾なら、あの戦闘服にも効果があるはず。いい？ ふたり同時に出て、そちらが先行して」

軽く打ち合わせると、ふたりはうなずき合って、曲がり角に飛び出した。

うまくいくだろうか。普通なら無理だ。もちろん。

邪神の肉体を持つ人間と、サイボーグ。そのポテンシャルに賭けるしかない。

クラが走り出そうとする。

キリエがサブマシンガンの銃口を上げた。

僕ははっとした。

その向きが、おかしい――。

「キリエさっ――」

発砲。

至近距離から、クラへ向けて。

閃光と炸裂。

「な――」

「クラ!？」

僕とアシリアの叫びが重なる。

かわしようがなかっただろう。クラは頭半分と右腕がふつとんで、壁に叩きつけられた。

キリエの持つサブマシンガンが、今度はこつちを向く。

左腕だけが意思をもったような不自然な動作。

それを見た瞬間、僕は理解した。

理解したけど状況は変わらない。

まずい。

トリガーが引かれる。

「くつ!」

キリエがとつさに右手で銃身をつかみ、弾道が逸れてすぐ脇の床が爆裂した。

さらに発砲が続いて、キリエは抑えるのに必死になる。

リコイルにあらがえず、そのまま仰向けに倒れた。

角の向こうから銃声が数発。重なった。

なにかが僕の傍へ転がってきた。サブマシンガンを握ったままの左腕だった。

とつさにアシリアを抱きかかえていた僕は、キリエの方を振り向く。

バリケードを越えてきた敵が三人、そのうちのひとりがキリエを撃ったようだった。

「ちくしょう!」

キリエの吠える声が聞こえる。まだ生きている。

「ああ……クラ……」

アシリアは茫然自失としているようだった。

なにが起こったのか――。

キリエの新しくつけた左腕に、なんらかの細工がされていたのは間違いない。

おそらく、遠隔操作可能なハッキングユニットが仕掛けられてい

ただ。

そこまで、手回していたのか。

僕とアシリアは、小鳥みたいに抱き合っているしかない。

「チエックメイトだぜ」

戦闘服のひとりが言った。

この声――。

この声は！？

突然、そいつは持っていた銃を仲間に向けると、横合いから発砲した。

「きさまっ！？」

ひとりは何も言わずに穴だらけになり、もうひとはひと言だけ遺して撃ち抜かれた。

僕は叫んだ。

「トウキさん！？」

「トウキ！」

また、僕の声は重なった。キリエにもわかったようだ。さすがは兄妹。

「おう」戦闘服のヘルメットを脱ぎ棄てると、その下からトウキの顔が現れた。

「あんた、あたし撃つたでしょう！」どうやら、左腕を吹っ飛ばしたのはトウキだったらしい。

「あんなおかしなもん、さっさと外した方がいいんだよ。他には当ててないだろ？」

それからクラの倒れた方を見やり、すぐに視線を逸らすと僕らの方へ歩んで、トウキは頭を下げた。

「巫女様、すまん。キリエの腕に仕掛けがあることまで見抜けなかった。あいつは――クラティナは残念だった」

「いえ」アシリアは目を閉じ、一度深く息を吸った。気持ちを切り替えようとしているのだろう。初めて見る仕草だった。「先へ進め」と言う事実以外、いまは必要ありません。あなたの方こそ、ご心

痛察します。あの子とは、昔——」

「ああ。昔の話だ」

「え、なんですか？」僕は思わず聞いてしまった。

「クラがヤタガラスにいたころの知り合いってだけさ。よし、急ぐぞ。キリエ、動けるか」

「右腕一本でも上等よ」キリエはすでに、サブマシンガンを拾いに行つて、右手に持ち替えていた。左腕は組織封鎖して、千切り取るみたいに肩から外している。

「えと、すこし、整理していいですか」僕はトウキに聞く。

「なんだよ」

「トウキさんはヤタガラスの一員で、ライア司令のスパイじゃなかったんですか？」

「ああ、そうだ。スパイさ。ただし、二重スパイってやつだ。アメノオハバリのシステムを落としたのもおれってこと」

「ああ……なるほど。ジーク艦長も抜かりない」

「アーリイには悪いことをしたよ。あいつがまさかそんなつもりだったとはな。帰ったら殴りつけてやる」

「それはもういいですよ」僕はくすりと笑った。アリスに平手を食らった時の顔が思い出されたからだ。「もう殴られてますから」

トウキは若干、意外そうに僕を見つめた。

「なるほど……、いや、それでいい」

ジークがもう殴られていたことに驚いたのではなさそうだった。

だから僕は訊ねた。

「僕は変わりましたか？」

「あ？ あー、わからないな。ただ、強くなった。そう見える」

「そうですか。……アシリアさん、だいじょうぶですか？」僕は小さな金髪を振り返る。

「はい。もう少しです。参りましょう」

気丈にアシリアはうなずき、僕らは隊列を整えた。

倒れたクラを見送ってやる余裕は、いまの僕らに存在しない。ト

ウキに撃たれた敵の兵士だつて。

だれも好き好んで殺したり殺されたり……。でも、前に進むつて、結局そう言うことで。

多かれ少なかれ、日常生活でも、僕らは進もうとする先にある、小さな障害物を排除して通つてゐる。そう言うものを振り返つて探してみる気がないから、気づかないだけなのだ。徒競走で一番になつたやつが、ビリのやつの気持ちを考えたりするだろうか？

僕はアシリアの引き結んだ口元を見て、それから歩みはじめた。それでもいつか、振り返つてみたいと思ひながら。

先頭のトウキがセキュリティ・ゲートを強制解除させる。

システムが落ちてゐる今だからこそできること。

いよいよだ。

次の部屋。

御神体がそこにある。

扉の先には――。

「待て。だれかいるぞ」

鋭くトウキは警告した。

奥は非常灯の光すらなく、真つ暗だ。どうやって発見したのか……。

「おれたちが最後だつたはずだ。まさか……、いや、どうやって？」

「正解だよ、トウキ・ラシャ。入りたまえ諸君。君たちの求める神はここにあらせられる」

この声は……。

力強く、魂を鷲掴みにしてくるような声音。

「ライア司令」

「いかにも。少々、暗かつたかね」

奥に灯りが点つていく。壁沿いに青白い、燐が燃えているような光。

しんがりのキリエが吐き捨てた。

「趣味悪い。なに考えてるの。イカれてる」

ライアのファンだったんじゃないだろうか？ でもまあ、この状況では嫌いになっても仕方がない。百年の恋だつて冷めるだろう。

元はなんの部屋だったのだろうか——ちよつとしたホールくらいの空間だった。その中央に黒い服を着たオールバックが仁王立ちしていて、入り口と反対側に枯れた巨木が置かれている。幹やその周囲に注連縄が嚴重に巻かれていた。

「あれです。あの樹が、八十禍津日神の御神体」

アシリアが声をひそめて言った。

「司令。ヤタガラスの一員としてあんたの狼藉は許せねえな。あの組織は天照の直属だったはずだ。あんたが占有するもんじゃねえ」
トウキが銃口を向ける。ライアは一見、なにも武器や防具になるものを身に付けていない。

それなのに、あの余裕はなんだろう。

「ならば、天照による連邦の占有は許せると？ この、茶番のような邪神との戦争が天照の一存で行われている事実。なにゆえ地上に秩序が必要だ。生の神イザナギの力が弱まり、死の神イザナミの力が強くなっている。これこそが神の定めた秩序ではないか」

「それでも人間は抗うんだよ。天照はそれに力を貸してくれる。どこがおかしい」

「すべてが。かつて起きた世界の崩壊。『天照の岩戸隠れ』。古事記にはこうあるな。『ここに高天原皆暗く、中つ国ことごとく暗し、これによりて常闇往きき。ここによろづの神の声はさ蠅なす満ち、よろづの災いことごとくに起こりき』。地上から光が失われ、黄泉と邪神が溢れた。この破壊がいまの人類には必要なのだ。神を操り、奢り高ぶる人類には。そしてそれを許容する天照……」

「うるさい！ 何人が死んだと思ってるの！ ふざけないで！」
キリエが耐えかねたように叫んだ。

「これから、もっと増える」ライアは静かに口調を落とした。「なにもかもが死に絶えるだろう。そう、破壊を望む神がいらっしゃる。天津神でも、黄泉津神でも、国津神でもない、ただ一柱坐します御

神——須佐之男命。根の国の王が！」

「ごたくはもういい、黙って消えろ！」

トウキがサブマシンガンのトリガーを握った。暫時遅れてキリエも射撃を開始。

銃声。

不思議と、うるさくはなかった。

発砲と閃光。

飛翔する弾丸。

その先にいるライア。動かない。

いや——その口がなにかをつむいだ。

僕にはなじみの深い音声。

独特の圧縮された波長の言葉。

「言霊!？」僕は思わず叫んでいた。いや、それは声になったかどうか。

ライアはゆつくりと手を挙げ、なにかを掴み取った。

空中で停止した弾丸だ。

いつの間にか発砲が止んでいた。

止んでいた、のではなく、停止させられていた。

動けない。

これは——アーリイ以上に強力な呪縛。

指先すら動かない。

「司令……アンドロイドだった……のか……」トウキがようやく、声を絞り出した。

「いや、違うな。マクベス准尉は、知っているか？」

「はい。……僕と同じく、災禍を生き残った人間」

「そうだ。その手の人間のみが、この力を会得できる可能性を持つ。神に選ばれるのだ。私は——」

ライアは手のひらを上にし、両腕を大きく広げた。

「私は須佐之男。その神意を汲み、神力を行使する者。うつし世の代行者、『現人神』である！」

「くっ……」だれかのうめき声。

圧倒的な気配がライアから発せられている。

これはタケミカツチを脱出するとき、クラから感じた威圧感と同じ種類。

だけど、桁が違った。

身体が冷えて、魂が凍ってしまいそうだ。

まともにライアの姿を見ることがすらできない。

「わたくしは信じます」そんな中、アシリアの声。その声は、不思議と、いつもどおりの澄んだものだった。「人類を。神を。そして、あなたを止めることのできる人を」

「ならばその希望から芽を摘もう。いま、ここから、すべてが終わるのだ」

ライアの振りかざした手に、サブマシンガンから放たれた弾丸が集まっていた。

「碎！」

言霊が発せられる。

集まった弾丸は、スパイラルを描きながら、一本の槍のように――。僕へと。

「――っ！」

息を呑む音だけが聞こえた。

だれの物だっただろう。

僕のか？

4

……。
……。

真実を話そうと思う、と、栗色の髪の女性が言った。

サクヤだ。

連邦の制服ではなく、白と赤に色分けされた袴のような千早を纏

っていた。こちらもぴつちりと身に付けている。

すこし離れたところに正座していて、僕は立ったまま向かい合っていた。

音はなにも聞こえない。

静寂の中で言葉は届くのだろうか。

「なんの真実ですか？」僕は聞いた。

「あなたの真実」よどみない答えが返ってくる。「あなたの存在の」「僕の……」

「ルーン・マクベスは五年前死んでいたの。あの災禍に巻き込まれ、命を落としていた」

「はい。そうじゃないかって、思っていました」

「ただ、その魂は黄泉に堕ちなかった。災禍の発生のような、ひどく時空が歪む現象のとき、まれに魂が違う場所へ入り込むことがあるの。あなたの魂は四次元に迷い込み、神々の領域へ近づいた。それを天津神が拾い上げ——」

サクヤは言葉を切り、しっかりと僕の目を見た。

「肉体を再構成し、地上へ遣わした。それが現在のあなた。いまのルーン・マクベス」

「よく……わかりません。いったい、僕はなんなのですか？」

「あなたのような存在を、『現人神』と呼んでいる。あなたは神の器。人間に神下ろしするための、御神体なのよ」

「僕が……御神体？」

「神はこの三次元において、非常に多くの制約を受けることになる。科学の発展で、かろうじてコンピューターを介し、物質へ宿ることも可能になったけど、まだまだ、身体をがんじがらめに縛られているのも同じこと。ならば、この三次元でもっとも自由に動ける存在人間を御神体としてみてはどうか？　しかし人間には魂がある。魂がある限り、入れ物には適さない。……もう、わかったかしら」

「僕には魂がない？」

「魂はある。正確には、空っぽの魂が。あなたはなにも感じない。」

なにも思わない。なにも聞かないし、なにも発信しない。本当はそれだけの存在だった。物質としての肉体と、言霊としての魂、ただの入れ物のはずだった」サクヤはそこで初めて、相好をわずかに崩し、「でも人間って不思議なものね。神様ですら思い通りにはできなかった。神様に選ばれるはずの入れ物が、逆に神様を選んだ。あなたは建御雷神を選択した。そして建御雷神もあなたに選ばれるを好しとした。ここに、もうひとりの現人神が誕生したのよ」

「もうひとり……。つまり、ライア司令も、本当に」

「彼は須佐之男の現人神。荒ぶる神、荒神としての須佐之男がライア司令に降臨している。須佐之男は帰りがっているの。高天原にお姉さんの元に。そう……。天照に甘えたがっている。それを、叶えて上げましょう」

「それは……。どうやって」

「あなたの持つ剣。『神度』は別名、『神門』と書くの。神の門……すなわち鳥居などに代表される、四次元への通り道。神度は時空を切り裂き、四次元を発生させ、それを高天原に繋げる力を持っている。ルーン君。神の剣を振るいなさい。恐れず戦うの。それこそが建御雷神の望みであり、須佐之男の望み。私は信じている。きつと――」

そこで急速にサクヤの姿が、その周辺が、僕の視野が、ぼやけはじめる。

そもそも……。

ここはなんだ？

僕はどんな場所で、サクヤとしゃべっていた？

もう見えない。

思い出せない。

なにが起こったんだっけ。

どこに居たのか……。

とにかく、戻らなくては。

そこでやるべきことがある。

戦うんだ。

ライア司令と。

そうでしょう？ 建御雷神命。

戦いこそが、あなたの喜び。

強敵こそが渴望を満たす。

きつと僕が、全力でぶつかっていく。

水底に居るみたいに、歪んだ声が届いた。

「さあ……いまこそ降臨のとき。その身に、偉大な、剣と雷の神霊を――」

5

僕は目を開いた。

いや、もともと、開いてはいた。

だから、開いたまま、さらに開いた。意識の問題。覚醒。

ライア司令の放った弾丸が、僕へと向かっていた。

「?!」

それを叩き落とす。

僕の喉から発せられた言霊。

手足を動かすように。

計算も、思考すらいらぬ。

いまや言霊は、僕の中に満ち満ちていた。

花畑に舞う蝶のように、身体の間々を飛び回っている。

「ルーン君……!？」キリエの声が引きつっている。

なぜだろう、と思ったら、僕の身体がビリビリと帯電したみたい
に発光していた。

それは、たしかに、びつくりする光景だ。

視線を上げる。

見据える。

ライア・ハイゼンベルク。

「手を貸したか、天照……」

ひとつ唸ると、ライアは地を蹴った。

そのまま、数十センチの飛翔。

黒と紫を足したような瘴気が、ライアの全身を覆っていく。

「醒！」

発せられる言霊。

「哨！」

迎え撃つ言霊。

ぶつかり合って、法則を変えながら、空間を白く塗りつぶしていく。

轟音。

爆音。

爆発。

「きやあっ！」

背後で悲鳴。アシリアか。

幸い、入り口は近い。

「下がっていてください！」

「なんだか知らないがわかった！」トウキの返答。

これで——と思った瞬間、その入り口から、わらわらと戦闘服姿の連中が現れた。

このタイミングで！

僕は言霊を放とうとする。

「禮！」

しかしライアの攻撃が邪魔をする。

やっぱり——僕がだれかを守るってのは、まだ、早いのか。

銃声。

アシリアを庇ってキリエが背中に銃弾を受けた。

トウキが反撃。

僕はまだ、ライアの言霊に抑えられている。

敵の数名がダウン。

敵の反撃。

狙いは――。

そのとき、しかし、さらに入り口からなにかが飛び込んできた。それは赤い風を残して、銃口を向ける連中に襲い掛かった。

「クラ!？」

アシリアだけが正確にそれを見抜いていた。

残像のような影は銃を叩き落とし、蹴りつけ、殴り倒した。ものの数秒の出来事。

「揖!」

ようやく、ライアの攻撃を弾き返す。たしかに圧倒的な力だった。言霊では勝てない。それは間違いない事実にした。

「クラ、無事だったのです……ね?」

アシリアの喜びの声が、途中で疑問形に変わった。

「はい」それもそのはず、クラは頭半分と右腕が、やっぱり無かった。その断面が黒々としたなにかに覆われ、蠢いている。自分でも若干呆れたように、「私も、ここまで人間離れしているとは思いませんでした。平気です」

「よかった……」この声はキリエ。

「あなたは、だいじょうぶですか?」これはキリエに向けたアシリアの言葉。

「はい。ただの9ミリ程度じゃ壊れません」

「興味深いな。邪神の組織が、そこまでの力を発揮するとは。よほど、天照のやり方よりも、正しい進化だ」ライアは感心しているようだ。クラが、残った片方の目で睨みつける。

「お前は知らない。いや、感じない。絶望のなんたるかを。喜びのなんたるかを。お前の口から出る言葉はすべてが空虚な詭弁だ。讒言で世界を滅ぼせはしない」

「たしかに、それは真実。ただし、すべては神の意思。ならば力でそれを示そう」

空中から床に降り立つと、ライアは手に何かを握った。

それは光を集めたように手元から凝縮した輝きを伸ばし、一振りの剣の形状を取った。

似たような物を見たことがある。

タケミカツチの攻性バリア、神度だ。

「その威力のあまり、死者すら蘇ると言う須佐之男の剣、『生太刀』受けよ！」

それが振るわれる。みんなの方へ。

とつさに、まずい、と思った。

「鴛！」

言霊を放つ。

爆裂音。

飛び散る破片。

なんだ？

なにが起こった。

ホールの一角が、爆破されたみたいにえぐられていた。

ただひとつ無事なのは、僕が言霊で守ったみんなの周囲のみ。

床も壁も、むちゃくちゃに切り裂かれて、硬そうな床材やその下の電子部品なんかがむき出しになっている。

ライアから向かって正面のほとんどが、断崖絶壁の亀裂みたいになっっていた。

これは……。

パラパラと、捲き上がった破片が、雹のように降り注いでくる。

圧倒されて、全員が声もでない。

「どうした。守るだけか、建御雷神。お前の力はそんなものか」

ライアは輝く剣を携え、舐めるように僕へ視線を飛ばした。

あれはただの脅し。

本当の威力はあんなものじゃない。

本気を出されたら、僕の言霊では防ぐことはできないだろう。だけ。

そう、ジークが言っていたっけ。

必殺技はあとで覚醒したほうがおもしろい。

まあ、実際は、結局、ちっともおもしろくないわけだけど。
ポケットから、渡された剣の柄を取り出す。

そこから、ライアと同じように金色の剣が構成されていく。

これが僕の剣。

タケミカツチの剣。

神剣『神度』。

「受けて立ちますよ」僕の身体から立ち昇る、電撃のような光が、
いつそう昂ぶっていく。すこしくらい格好をつけておくべきだろう。

「それから言っておきますけど、あなたは僕に勝てない」

初めて、ライアの表情に素が走ったと思う。

「それは、なにゆえだね？」

「どうして、僕だけがって、ずっと思っていたんです。なにかを守
るうとして守れず、守ってもらってばかりで、だれかに甘えてば
っかりで。それでいて、戦う意欲は人一倍あるんだ。……矛盾です
よね？ だけど、」

構成された金色の光。

威光を放つ剣。

僕は八双に構える。

「あなただってそうだったんだ。ライア司令のことを、僕は指して
いるのか、須佐之男のことを指しているのか……さだかではないけ
ど。あなたは求めている。母親を。姉を。女性の、絶対的な庇護を。
そうでしょう？」

ライアの眉が寄った。僕の言うことが、理解できないのだろう。

だったら、すぐにわからせてあげよう。

「ライア司令。あなたは、すこし、思い違いをしていたんだ。あな
たは現人神。神意を実行する者。だけど、その行動が意図するもの
までは、わからなかった。だから――」

僕は走り出す。

雷撃の軌跡を描いて。

「この一太刀が、須佐之男の本意を、理解させてくれるでしょう！」
「来るか！ 建御雷神！」

ライアは迎え撃とうと、生太刀を構えようとした。
その手が――動かない。

驚愕がライアの表情を彩った。

僕にはわかっていたし……そう、サクヤにも言われていた。

須佐之男の望み。

それを叶えるために、僕は神度を振るう。

動けないライアめがけて、僕は八双から袈裟懸けに剣を打ち下ろした。

神度の神力で時空が割り裂かれていく。

僕はライアではなく、三次元を切ったのだ。

無理やり開かれた四次元は、一瞬で姿を消し、その歪を直そうとした物理法則が、閃光を発した。

白光。

輝き。

僕が剣を振り下ろし終わったころには――。

僕の目の前から、ライアの姿が消えていた。

四次元へと、去って行ったのだ。

須佐之男の神意のまま……。

天照の元へ。

それが、須佐之男の、本当の望みだから。

「あれ……」

手から剣が滑り落ちる。

無機質に床へ転がったそれは、もう金色の刃を形成してはいない。
全身から力が抜けて、僕は膝をついた。

「ルーン君！」 駆け寄ってきたキリエが、僕の肩を抱いた。「だいたいどうぶ？ なにが、起きたの」

「心配ないです。僕たちは勝った、ってことだけ、……」 いまや、しゃべるのもおっくうだ。

「ルーンさん。ありがとうございます」

すこし向こうから聞こえたアシリアの声。いつの間にかうつむいていた僕は、その方を見るために、顔を上げねばならなかった。

「次はわたくしが役目を果たす番。この身を人柱として、八十禍津日神を鎮めましょう」

「アシリア……さん」

「八十禍津日神の禍を直すために、神直毘神が生まれたことはお話しましたね。そのとき、実は、さらにもうひとつ、『いつのめ蔽女』と呼ばれる巫女が生まれたのです。それこそがわたくし。不慮の事態のとき、八十禍津日神を鎮める楔の存在」

アシリアはきびすを返し、注連縄を捲かれた樹へと歩んでいく。

僕は、なんだかよくわからないけど、内からの衝動に任せて、行こうとするその姿を止めようとした。

でも力尽きた身体は、バランスを崩して倒れかけ、キリエに支えられるのが関の山だった。

「わたくしは言霊となって、神とひとつになってしまいますけど……。ルーンさん。戦争が終わったら」樹へと手をかけ、アシリアはすこしだけこつちを振り返った。「きつと、また、お茶をしましうね」

閃光。

真っ白い輝きが空間を、僕を、みんなを埋め尽くす。

「アシリアさん！」

僕はとにかく、叫んだ。

声になったかどうか。

でも叫ばずにはいられない。

なぜなんてわからない。

それでいい。

僕は叫ぶんだ。

大切な人がいなくなるときなんて、きつと、だれもが同じ。

泣いて、叫んで……。

あれ？
でも、僕は。
涙が出るんだろうか。
出たらしいな……。
ああ、真っ白だ。
なにもかもが。
すべて。
白い。
きつと。
また。

Ep・巫女

空は快晴で、秋晴れの涼やかな風が街路を通り抜けていた。

連邦軍の本部基地近く、にぎやかな街通りの一角にある喫茶店。

すこし洒落たその扉を押して、栗色の髪的女性が、店内へ静かに立ち入った。

昼下がりの店内は五分の入り。寄ってきた店員とひと言ふた言会話し、それからひとりである場所を目指して歩いて、椅子を引いた。

「お待たせしたかしら、アシリアさん」

「いえ。それほどでも。お忙しいところ、ありがとうございます。」

サクヤさん

「こつちこそ。無理を通してもらって、悪いわ」

四人掛けの席へちよこんと座って、紅茶のカップを傾けていたアシリアは、春の日差しのように微笑んだ。サクヤも微笑み返し、席につく。こちらは、秋の気配。

「どうぞ」

すでに置かれてあったカップにポットから紅茶を注ぎ、アシリアは丁寧に勧めた。

サクヤは礼を述べて受け取り、ひと口啜りこむ。

「ん……ダージリン？」

「ええ。最初はストレートで……。次はフレーバー・ティーを嗜むのが、ふふ、通な愉しみ方かと」

「私も紅茶を覚えようかな」

「あら、それじゃあ、次からご一緒されますか？」

サクヤはすこし肩をすくめて、もうひと口紅茶を啜り、カップを置いた。

それから窓の向こう、快晴の空になにかを見つけようとするみたいに目を向けた。

「いろいろ、今回も、裏で立ち回ってみたけれど」追懐する口調で、

頬杖をついた。「やっぱり、駄目ね。なにかもが後手後手で……。人間は私の想像の上を、いつも進んで行く。空の上の鳥みたいに」「天照の巫女ともあろう方が……。あなたこそ、天高くより見下ろしているのでは？」

「ま、世間一般ではそうなんでしょうけど。私は……。後悔することの方が多いわ。アーリイは救ってやれなかったし、あなたのクラテイナも、危うく……。あ、彼女、どうしてる？」

「ええ。わたくしもびっくりいたしましたけど、数日で生えてきましたわ」苦笑するみたいにアシリアは笑った。「寝て起きたら戻っているなんて……。これでまた、邪神の組織の可能性が、ひとつ広がったわけですね」

「まだ、続けるのね。摂理に反して」

「ええ。でも、それを申し上げるなら、邪神との戦いこそが……。ライア司令も同じことをおっしゃってましたけど、あの方の言は極端としても、真実の一端は含んでいます」

「天照は人と共に在る。それは、すべての天津神も同じ。ま、こんな議論は、いまはいいわ」

「そうですね」

「連邦軍は宇宙艦隊の過半を失い、ライア司令の離反による内部の混乱はいまも続いている。人類の未来は、なかなか、今後も安泰ってわけじゃないから。取り付けられる協力は、ちよつとでも得ておかないとね」

「まあ、現金ですこと」アシリアはまた苦笑する。「わたくしとしても、連邦の安定は、大切に思っているのですよ？ でも、しばらくはだいじょうぶでしょうし、これから先は……」

「そうね。あの子が成長して、どんな活躍を見せてくれるか。頭の痛い現状だけど、それだけが楽しみよ」

それからふたりは、なにげない話題で会話を続けたようだ。

地上で流行っているものとか、行きそびれた海の話。

アシリアは塩湖に行った話を自慢したようだ、サクヤにはピン

とこなかったようだ。肌に悪そうとも思ったか。

どこにでもある、午後の風景。

それに溶け込んだ時間が流れた。

「……さて、そろそろかしらね」

しばらくして、サクヤは紅茶を飲み干すと、席を立った。

「あら、もうそんな時間」アシリアは腕時計に目を落とした。「次はもっとごゆっくりと……」

「そう、予定が合えば。なんの用向きもなしに、こうやって会った
りしたいかな」

「ふふ。それでは、また。……あら」

「この払いは持ちます」サクヤは伝票を取り上げて、レジへ向かっていった。

栗色の髪が支払いを済ませ、扉を抜けていった。

その姿と入れ違うように、ひとりの少年が店内へ現れた。

それを見つけたアシリアの口元が、自然と笑みの形になる。
思わず笑顔になってしまう人。

そう、大事な人だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3128w/>

Nehalem（ネヘイレム）

2011年9月2日03時17分発行